
ある家族と愉快的仲間たちと...

サイレンス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある家族と愉快的仲間たちと…

【Nコード】

N0141B

【作者名】

サイレンス

【あらすじ】

こんなにもオレ達の日常は色んな事が楽しくて、何でもない事が大変な事になっていった…ある家族、『タケクラ家』と共にそんな楽しくて非常識な日常を送ってみませんか？

第一幕 『発情期』はお好き？

心地よい春風を肌で感じる今日この頃、今日から新学期だと言うのに家では我が貞操を守るため朝からドタバタコメディが始まる訳で……^{たけくら}どうも、武蔵ムサシです。

全国の姉がいる諸君には分かると思うが、姉ほど強く、頭の上がない人物はこの世にいないんじゃないかとオレは本気で思っている。もし、家に両親がいなく、家政夫一人と幼なじみの居候一人と弟であるオレと姉……誰が一番の権力を持つと思う？

確実にオレではないとして…

家政夫…まさか。

居候の幼なじみ…確実に乗っ取られましたな、その家は。

やはり選択権として残るのは姉しかなく、現にオレは今日から新学期、高校二年の記念すべき初日なのに姉に追い掛けられている訳で…

「むうさあしい〜！ 今日という今日は逃がさないわよ〜！」

「零ねーちゃん、頼むから落ち着いて！」

何故にオレは下着姿の姉に朝っぱらから追い掛け回されなければいけないのだろう。別に悪いことをした覚えはない。

ねーちゃんの私有物はいじってないし、ねーちゃんの好きなポテチだつて勝手に食べてないし…となるとやはり『アレ』しかなかるう。要するに『発情期』みたいなものだろうか。シヨタコンで弟LOVEの零ねーちゃんは一、二カ月に一回くらい『発情』するんだ。最近、彼氏もいないし、欲求不満なのかなあ…なぞと考えながら、オレは犬走りの脇を走る長い廊下を走りながらどうにかアレの対策を考える。こんなところで我が貞操を奪われてたまるか。

「んもう、じれったいなあ…しょうがない！ タケクラ流…三式、疾風ッ！」

「なっ！？」 ねーちゃん、ちよ、ちよい待つ、ぐはッ…！」

瞬脚といって一定の距離を瞬時に移動できる飛び蹴りを背中に受けながらオレは心から思う。いくらじれったくなったからって何故にウチの武術まで駆使してオレを捕まえようとするんだこの姉は…。

「さゝあ捕まえたわよブラザあゝ！」

「ね、ねーちゃん、や、止めて！ 朝からオレの貞操を奪おうとするのは止め…」

「問答無用！ いただきます！」

「何、朝から実の弟召し上がりうとしてんだ、零」

あら、とオレのシャツに手を掛けていた零ねーちゃんは背後の聞き慣れた声色に恐る恐る振り返る。そこに立っていたのは決して鬼なんかじゃなく、殺気漂ったウチの家政夫。

「まったく、弟にまで手だすとはな。お前は盛りのついた猫か」

「あら、私のは盛りのついた猫なんかとは比べものにならない…」

仰向けになっているオレの体に馬乗りになっている零ねーちゃんは残念そうにオレが降りた。ナオキと言う名の家政夫はウチの実質ナンバーワンを恐れさせるほどの権力を持っていたんだ。まあ、権力って言うても…

「ナオキ！ 謝るからまたこの前のように私の朝ご飯だけ作らないとか止めてよね！」

「大根でもかじってなさい！！」

大根は少しひどいような気もするなあ…確かこの前はもやしだったから少しは格上げされたのかな？

「ムサシも早く顔洗って朝飯食べてしまえよ。新学期から遅刻する訳には行かないだろ？ 蘭はもう食べてるぞ」

「あつ、うん。分かった」

そうだった。今日から新学期ではないか。姉の暴走さえなければ平和なホームドラマが送れたものを……

オレはまだ、家政夫ナオキに懇願する零ねーちゃんを置いていきながら朝飯の待つ居間に向かった。

第二幕 春眠曉を憶えず…とな

朝、野獸を払い除けたオレであります、次は朝飯争奪戦がある訳で…お早ようございます、武蔵ムサシです。

発情期の姉を家政夫を利用し（？）退けたオレでありましたが、何故、新学期の朝からフルマラソンを全力疾走するくらい無駄な労力を使うのか疑問に持つ訳で…

オレはそんな疑問を心の奥底タンスに無理矢理しまい込むと、朝食を取るために赤髪の幼なじみのいつもの席に座った。

「お早よう、蘭」

うん、朝から爽やか三組だぞ、オレ。しかしこんななにこやかに挨拶してもこの低血圧幼なじみには通用せず、

「んあ……おはよムサシ。朝から走り込みなんて元気でいいねえ
私はもう眠くって眠くzzz」

右手にお箸、左手にお茶碗を持ちながら隣で器用に二度寝しているこの幼なじみをオレはどう接すればいいのだろう。いや、どうする事もできない。なぞと反語を活用してみる。まあ、とりあえず起こさないと話にならない、始まらない。

「蘭ッ！ 起きろって！新学期から遅刻はまずいだろ」

オレは蘭の頬を往復ビンタしながら耳元で叫ぶ。生半端な事じゃ返り討ちに遭うオチだ。

「ううう！ よく言うじゃない、ほら、春眠曉を憶えずっていうじゃないくだから私も…zzz」

まさか自分の歌がこんな寝坊の理由に使われるなんて、作者はあの世で泣いてるぞ。

「…まっ、少し経てば起きるか」

オレはそんな安易な期待に賭けながら食卓に並んだ豪華絢爛朝食セツトを食べ始めた。

うん、さすがは家政夫ナオキの手料理だ。
言うこと無し。

……しかし、朝から刺身が食卓に上がっているというのは、我が家のエンゲル指数がかなり気に掛かる。
ウチくらいだぞ、朝から刺身なんて食べれるのは。

さて、朝からカジキとかシイラとか訳分からん魚の切り身に噛りついていたオレでありましたが、ようやく腹も満腹になり、今だに、こつくり、こつくりと器用に熟睡している蘭を文字通り叩き起こすと、二人仲良く学校へ行く訳でして……
その時、野獣を止めていた家政夫の運命とは！？

へっ？次はオレ達の話じゃないの？

第三幕 アウトローな零と家政夫なナオキ

何故、オレは朝から下着姿の見た目はねーちゃん、実は××才（実年齢は自主規制）の武蔵零を止めなければならぬのだ。ん、俺か？……ナオキと呼んでくれ。

どうやらムサシ達は再び零の来襲が来る前にそそくさと学校へ行つたらしい。新学期早々遅刻しないといいのだが。それに比べこの女はムサシがいなくなつたと分かれると深々とため息を吐きながら

「ハア…今日も仕留め損ねたわ。まったくいつまで経っても同じリアクションね、あの子は」

などと口走っていた。まったく、実の弟に対して仕留め損ねたはないだろ、仕留め損ねたは。

「ナオキ、私の朝食はー？」

「ああ、ちよつと待つてろ」

俺は軽いため息を吐きながら奥の厨房へと向かった。たまには自分で朝飯くらい作ればいいものを。そんなんじゃ一生掛かつてもお嫁に行けないぞ、オイ。

「うるさいわね、私のこの美貌があれば引つ掛かる男なんて山のようにいるのよ！ 山のように！」

いつからお前は読心術が出来るようになったんだ。こいつにそんな超人的な能力を持たせてはいけない。下手すれば世界を征服されるぞ。

「何、驚いた顔してんのよ、あなたとは長い付き合いでしょ。考える事くらいは大体分かるわ」

「それは、それは…下手な事は考えられんな」

「あら、あなたいつも下手な事考えてるの？」

「お前の行動基準を考えてみる。下手な事だつて考えなくなる」

「アウトローが私の生き方よ」

お前が道を外れすぎて逆に真つすぐ、正当な道に向かつてくれる可能性に賭けるぞ、俺は。

まあ、とにかく、今はあのアウトローねーちゃんの機嫌を損ねないよう、朝飯を作ってしまったおう……ん、メニューが気になる？しょうがない、細かくは教えられないが少しだけ教えてやろう。

大根。

朝から騒いだ罰だな。

では、俺は今から暴動を起こすだろう？零を止めてくる。俺がまだ無事だった時、またお会いしよう。

第四幕 引き摺りゆくも人生か…

新学期の朝、オレは寝呆け眼の赤髪の幼なじみを引き摺りながら今では慣れた高校ロードに登校する訳で…へっ！？ オレですか？
どうも、武蔵ムサシです。

空は蒼く澄み渡り、風は春の淡い香を運んでくる。そしてオレは幼なじみを引き摺る。

「ん、むにやむにや……そんなに食べられな……zzz」

この幼なじみは腕を引つ張られながら引き摺られても熟睡できるスキルがあるらしい。しかも夢は食べ物関連か、ベタな夢を見れる蘭がやや、羨ましい。悩みなんて無いんだろっなあ…コイツは。

「んっふっふっ！何から食べてあげようかし……zzz」

学校まではあと数百メートル。周りには初々しい新入生達が不穏な表情でこちらを見ている。まるで、主人の歩くスピードに着いていけない子犬を見るような、そう、哀れみの交じった物珍しそうな眼で。

新入生諸君よ、コイツも立派な先輩だぞ……一応。

「か、勘弁してください！ごめんなさいッ！」

ん、何だ？急に謝り出したぞ。先程の階段で鈍い音を響かせながら引き摺って来たのがまずかったか。

「おでんだけは！頼みますからおでんだけは！ あっ！ 熱ッ！

熱いッ！」

もがき苦しんだるとこ悪いんだけどあんまり足をバタバタさせるとパンツが見えるんですけど…中学から上がったばかりの男子新入生にはちと刺激が強すぎるかと。蘭も黙ってりや美人だし、スタイルもいいのに…もったいないったらありやしない。ん、スリーサイズ？そういう事は本人に直接聞いてくれ給え。

ようやく校門か近づいてきた。さすがに引き摺りながらの登校は疲

れる。さて、今日も有意義のある学校生活を送らなくては。

……次は学校編だな、こりゃ

第五幕 蘭と自己紹介タイムと…スリーサイズ？

えーと……こういう時ってどうやって始めれば良いのか……えっ！
？ もう始まつてるの！ あ、えと、どうにか学校に辿り着くことが出来た私、麻蔵蘭であります。えっ？ 無事には見えない？ ああ、だからさっきから頭にたんこぶ出来たのか……と、言うことで、今回はこの私、麻蔵蘭がお送りいたします！

「おはようみんな！」

朝、ムサシに引き摺られながら登校した……らしい私は今日から一年間生活することになる新教室のドアを勢い良く開けた。

えっ？ 低血圧のお寝坊さんじゃなかったのって？ 私、朝は弱いけど一度ぱっちり目が覚めればテンション急上昇するのです！

「おはよう、蘭。朝からテンション高いね」

友人A、いや、この子は結構重要だから名前出しておこうかな？

友人Aもとい橘 渚は熟読していた本を置き、私に笑いかけた。

うん、今日もその眼鏡がチャーミングだよ、渚！

「……おはよう、蘭」

私が渚の前のマイデスクに座ると近くで話していた友人B、友人C、友人Dが私の周りに集まってきた。ハモリ聞かせている事はいつもの事。密かに練習してるのかなあ？

「ところで、蘭。新学期って言うのに何で制服が所々汚れてるの？」

「」

「えー？ え、えと……あっ！ アレよ、渚！ 朝から猫追い掛けて転がってたから！」

「朝からねえ……もう少し大人になったらどう？ 猫追い掛けて転がり回る年頃じゃないでしょ？」

「だ、だよ……アハハハ、ハ……ハア」

い、言えない！ 朝から幼なじみに引き摺られて汚れたなんて口が

裂けても言えないわ……ホントに裂けたら嫌だけど。

ムサシも、もう少し優しくしてくれてもいいのに！ 私だって一応は女の子なんだから例えば、お姫さま抱っこで運ぶとか出来ないのかしら。

いや、それはない。最高でもおんぶくらいだわ。あのキャラにお姫さま抱っこは似合わないもの。

「えー、であるからして……」

五人で世間話をしているとあつと言う間にチャイムが教室に鳴り響き、堅物の国語の教師がやってきた。名前は……んー、何だったかなあ……ともかく、周りの皆が睡魔に襲われ力尽きてゆくのを私は観察しながら、スラスラと黒板に板書されてゆく文字をノートに写す。えっ？別に楽しそうじゃないから自己紹介タイムにしないか？そうねえ、それも良いわね。簡単にウチの家族説明しちゃうと……

武蔵ムサシ……えーと、一応主人公らしいわね……それ以外はただの高校生。ルックスやや高、運動神経ほどほど、成績、低ッ！！

武蔵零……ムサシのおねーさま。年齢は……私の口からはとてもとても女の私からみても零おねーさまは魅力的ね。特にあの雪のように白い肌と髪。あつ！髪は白髪じゃ無いのよ！銀髪よ、銀髪！あと、スリーサイズは自分で聞いてね。

ナオキ……ウチの家政夫よ。自分では否定してるけど……別名真っ黒男。いつも黒い服ばかり着てるのよ。容姿は一言で表せば「美人」

よ。あつ！一応言っとくけどナオキは男だからね、お・と・こ！一年の頃の授業参観で一際注目浴びてたから、あの人。年齢は忘れちゃって言ってたけどどう見ても二十代後半よねー！

あと、私。以上……！

…自分の紹介？ いや、なんか恥ずかしいじゃない！！ 簡単に言えば…

赤い髪・スタイル良し・成績・運動神経良し！

えっ！ 良い事しか言っていない？ ま、まさかあゝ！？ アハハハハハ… 苦手なモノ？ そう言う事はまた後日と言うことで…

スリーサイズは秘密よ！ 秘密！

えっ？ もう時間？ ゴホン！ さて、無事に登校できた私とムサシですが、いつの間にか謎の来襲が！？ どうなるムサシ！ 次回につづく！

あれ？ ムサシだけなの…？

第六幕　ぶっちゃけヤケクソ…？

zzz…　ハッ！　って…アレ？　授業終わってる…てかもう放課後！？　てかみんなは！？　…あ、皆さんはいたんですね。どうも、寝過ごした武蔵ムサシです。

目が覚めてみるとそこは異世界だった、なんて話はよく聞くけどオレの場合は目が覚めると、そこには乱雑に散らかった誰もいない教室だった訳で…。

「誰か起こしてくれても良いよな、フツ…」

オレの天使のような寝顔から起こさなかった気遣いはありがたいのだが、放課後になってからは、そして最後の一人が帰るときくらいは起こしてくれても良いのではないか。よく言うではないか、小さな親切大きなお世話と。

「…とりあえず、帰りますか。しかし蘭のヤツまで無視かよ、朝の事怒ってんのかな」

オレンジ色に染まった教室で一人淋しく帰る支度を始めるオレ。嗚呼、虚しいっいたらこの上ない。結局このまま通学路をひたすら歩き、バスを乗り継ぎ、家でナオキの料理を食らい、風呂に入って布団に直行。そんな人生でよいのだろうか、オレよ。

ん？前の回で蘭が今回は謎の転校生襲来で、どうなるムサシって予告だった？何、もしかしてオレ、帰り道に襲されるの？そんなの勘弁なんですけど…別に恨み買っている憶えはないし、そんな危うい転校生をオレは知らない。

…まさかとは思うが、寝過ごして未来が変わったか？実はオレが寝てる時に…

担任　転校生の　だ、みんな仲良くするんだぞ。皆　ハイイ！！
転校生　こんにちは、私、　と申します。趣味は…

担任 自己紹介は終わったかね？それじゃあ君は…ムサシの隣が空
いてるからそこに座りなさい。

転校生 えっ、ム…サシ君！？あのムサシ君？

オレ …ZZZ

えらいこつちやあゝ…！！！！ 運命チックな出会いをまんまと見
過ぎてしまったのか、オレは…！！

いや、ま、まだ間に合うかもしれない…明日がある！ 明日隣に座
っているのが転校生なら…運命チックな出会いが待ってるはずだ！
！ そしたら、あゝなつてこゝなつて…ウッフ、みたいな展開か！

オイ！

オレは誰もいない教室で怪しい笑みを浮かべると出来るだけ早く今
日を終わらせるために机の上のカバンを引ったくり、早々と校門を
後にした。

…だが、その日、オレは人生最大の恐怖に見回れるのであった…へ
っ、言い過ぎ？ オレだって言い過ぎだと思いたいわー！！ 人生
最大の恐怖だそ！？ オイ、無視するな！ そこ、哀れんだ目でオ
レを見るなあ！！（泣）

第七幕　えっ、今回も進展無いの！？

さて、オレは人生最大の恐怖を迎える、いや、できるだけ避けたいけど…そのために通学路を歩いている訳で…どうも、ビクビクしてまず、武蔵ムサシです。

駅までは学校の近く（とはいってもキロ単位の距離はあるけど）の商店街から数百メートル。今日も賑やかな商店街の中をオレは一人、物陰に隠れながら歩いている訳で。

「ど、どこなんだあゝ！？　人生最大の恐怖は…」

この年で人生最大の恐怖なんぞを体験したくないオレは、どうにか安全に帰路に着きたいと思い、辺りを見回してみたが…

特に変わった事もなく、夕焼けを浴びながら買い物を楽しむ主婦たちを眺めるオレは一体何なのだろうか？　傍から見れば物陰に隠れ、熟女達を凝視する怪しい変質者にしか見えない。

い、いや、人生最大の恐怖に見舞われるくらいならこの際、変質者でも怪しい人物にでもなろう。今回はそれだけの価値がありそうな気がする。

「あら、ムサシ！　こんな所でなに熟女の奥さん方眺めてるのよ。あなた熟女好みだったっけ？」

こ、この聞き慣れた凜とした透き通った声質は…とオレは恐る恐る振り返る。

「こゝんな美しいおねー様がいるっていうのに！　あなたも物好きよねえ…」

美しい新雪のような肌、銀雪のような美しい長髪を持つ実姉、零ねーちゃんが何か面白いモノを見つけたような堕天使の笑顔を浮かべていた。こ、これなのか！？　人生最大の恐怖とは！

「れ、零ねーちゃんとしたの、こんな所で？　今日仕事だったっけ？」

「いやゝナオキに買い出し頼まれちゃって…今日はムサシの大好き

なコロッケよ」

これが人生最大の恐怖とは思えない。朝はああだったが、いつもは弟思いのよい姉だと正直思うし。

「あら、なんだか元気ないわね。そうだ、イイコトしてあげ…じゃなくて教えてあげる！さっきあそこ角であの子にあったのよ！ほら、名前何だったかなあ…よく昔、ムサシと蘭と三人で遊んでた女の子！」

そういいながら零ねーちゃんは駅とは反対側の方の角を指差した。オレと昔遊んでた女の子？

ん、今なんか嫌な思い出が脳裏を掠めたぞ…

「もしかしたら帰り道あたり逢うかもしれないわよ。帰りの途中でしょ？一緒に帰りましょう」

「う、うん…そだね」

先行く零ねーちゃんの後を追いつながらオレはその女の子に逢うことを心の隅っこで拒否していたのかも知れない。そしてその気持ちは実物に逢ってから謙虚に表れてくる訳で…

次週に続く！？

第八幕 寝不足と蘭の秘密！？

日が経ちました。昨日はあまり眠れませんでした。今日こそあの噂の転校生に逢うと思うと…かなり心配な訳で…少し眠いですが、武蔵ムサシがお送り…zzz

「むゝさあゝし 学校行こうゝ！」

「んゝもうそんな時間か…むにやむにや…」

いきなり部屋に入って来るや否や、柄のある暗幕を開き、寝不足のオレにめいっぱいの太陽光を浴びせる蘭を、オレは出来るかぎり不機嫌そうな顔で睨み付けた。どうしてこの子はこのように日に限って目覚めがいいんだ？そして、どうしてオレはこういう日の前夜に限って眠りにつけないのだろうか。

「ほゝら、遅刻するよゝ！！ えいやッ！」

と、恋愛ラブコメゲーム張りにオレの体温で暖まった布団をひっぺ返すと、まだ完全には目を醒ましていないオレを片手で引き摺りながら居間へと連れていった。と言うよりは連行したの方が分かりやすいかもしれない。

「お早ようございます、零おねーさま。今日も朝早いですね」

「寝過ぎはお肌に悪いのよ それより、あなたこそどうしたの？ 今日ほこんなに早起して」

時計の針はまだ六時十分。毎朝遅刻ギリギリ七時半近くに起きる蘭にしてはこの時間に起床したのは快挙だ、奇跡だ。

そんなミラクルを起こした蘭は乱暴にオレを指定席目がけ放り投げると、自分はナオキに朝のおかずのおねだりでもしに行くのか、厨房へと向かっていった。案の定、慣性の法則には逆らえなかったオレは全身打撲の体を痛々しく起こしながら零ねーちゃんの方を向いた。さすがは我が姉。実の弟が放り投げられても微動だにしないわ。

「お、おはようねーちゃん…」

「おはよう、ムサシ。今日は昨日の転校生に逢えるといいわねー！結構美人になってたわよ、名前は忘れたけど」

「オレもさっきから頭の片隅に引っかかてるんだよね…なんか無理矢理思い出そうとすると悪寒が走るし」

「確かあなた、蘭と同じクラスよね？それなら蘭ひその子の名前知ってるんじゃない？昔の事は憶えてなくても自己紹介くらいは憶えてるでしょ？」

「そりゃそうだ。しかし何故、突如の転校生であり、昔の幼なじみ登場にあの蘭がオレに何も言ってこないのだろう？んー、おかし過ぎるぞ。」

「ムサシに言ってないとなれば…あの子、何かムサシに隠してるわね」

「蘭がオレに隠し事ねえ…何やらやっぱり危ない感じがするんですけど」

「何言ってるのよ、男でしょ？頑張りなさいよ！」

「零ねーちゃんは立ち上がりついでにオレの背中をバチンッ！と叩くと鼻歌混じりに自分の部屋へと帰っていった。」

「頑張りなさいねえ…まあ、頑張るしかないんだけどなあ…」

第九幕 転校生の名前は神田あすかって言っただって（前書き）

新キャラ二人登場です！展開が苦しい？突っ込まないで…

第九幕 転校生の名前は神田あすかって言うんだって

さて…至って普通に登校したオレは、不安な面持ちのまま席におとなしく座ってる訳で。波瀾万丈高校ライフ、武蔵ムサシがお送りします。

ただ今、八時十分。ホームルーム開始まではあと二十分といった所。今だに隣の転校生の姿無し。

落ち着かない様子で自分の席に座るオレをクラスメイトは何やら不審な目で見ているが…気のせいだろうか？ 特にむさい男共の視線が痛い。オレはそっち系の趣味は無いぞ。

それにしても…蘭のヤツはさつきからキョロキョロと何を警戒しているのだ？

何か悪いことでもしたか、うん？

「ムサシ、さつきから落ち着かないが、どした？ まさかあの転校生待ちかオイ！」

フーセンガムを膨らませながらオレの机の上に座るこの金髪不良男は、翔。

読み方はシヨウじゃなくてカケルだぞ、カケル。

オレとは中学からの付き合いだがヤツは見た目と違い機械オタクだ。自分で言ってた。

「オレはあの油の臭いと金属の重厚なボディ！ それに囲まれてればご飯三杯は……以下省略」

みたいな事をオレに二、三時間語ってられる猛者だ。

「まあ…一応そんなもんだ。昨日、オレは一日熟睡イン・ザ・ドリムだったからまだ転校生に会ってないんだ」

「その噂の転校生ちゃんはかなり会いたがってたけどよ。てか、お前が熟睡してただけで転校生ちゃんはなくも悪くないけどな」

「しかし翔…少しくらい起こしてくれても良いんじゃないか？ 一

日中ほつたらかしはちとへこむ」

「それじゃあ、オレの発明品試してみないか？首輪なんだけだよ！脳が睡眠状態に入るとその首輪から数万ボルトの電流が…」

「いや、止めとくよ…」

過去に翔の発明品を試してみた経験があるが、一度川の向こうのご先祖様を見た時が多々あるのもう二度と生死を彷徨いたくない。

「…来た！！」

蘭の殺気が増した。というか教室内で殺気を出すな。

「おはよう」。あつ、ムサシー！ 会いたかったよ！！！！ 昨日は死んだように眠ってるんだもん」

殺気で満ち溢れた教室なぞものともせず、スライド式の扉を勢い良く開けた転校生はオレを見た途端、飛び付いてきた。

「ボク、はやくムサシに会いたくて早く家出ただけど道に迷っちゃって…」

「イテテテッ！！ 痛いッ！てか引つつくなよッ！ ん？ なんか柔らかいモノが背中に…」

「ハアアアア… 喝ッッッ！！！！ 早く離れなさいよ、引つつき虫！

」

蘭の爆烈鉄拳によつてオレは教室の床に爆音と共にのめり込んだ。セリフが無いのはそんな事叫んでる余裕が無かったって事。

「昔と同じだね、麻蔵蘭！ 暴力で解決するなんて今時流行らないし、そんな拳ボクには当たらない」

「あなたこそッ！何調子乗って私の拳避けてるのよ！ ムサシに直撃しちやっただじゃないの！」

「ち、ちよつといいか？ 全然話が読めん」

二人の間に翔はバチバチと散る火花を鉄板シールド（翔自作）で弾きながら割り込むと、二人の顔を見回した。

うん、オレ自身もさっぱり分からん。

「しょうがないわね、この私、麻蔵蘭が説明してあげるわ。私とムサシ、そしてこの神田あすかは小さい頃、ここら中を恐怖に陥れた

元『黒い三連星』なのよ」

「…誰がマツシュで誰がオルテガだ？」

「ハイ、そこ深く突っ込まない！…まあ、あすかが転校してそれつきりだったんだけど」

「ボクが急に帰ってきたから蘭は焦ってるって訳」

「なるほど…要するに蘭ちゃんとあすかちゃんは旧知な訳で仲が悪いと…こりゃあ世紀の美女対決だな、オイ！」

「おっ！？キミ、ボクの事知ってるの？」

「勿論。神田あすか、身長169センチ、体重ピーー（自主規制）キロ、顔立ち上の上、美しい黒髪をポニーテールにしているのが特徴でバスト88センチ、高校生でありながらグラビアの撮影もしているアイドル！…だろ？」

お、恐ろしい…たった一夜でここまで調べあげるとは…一歩間違えればストーカーで捕まるぞ、翔よ。

「なるほど…要するにキミはボクのファンって事だね　けど、どんなに思われたってボクにはムサシがいるから…」

いるから…って、そろそろ誰か助けてくれよ、マジで起き上がれないんだからな！

「…で、アンタは何で戻ってきたのよ！　アンタが来る時は厄介事持ってくるに決まってるんだから」

「んゝ、ムサシを迎えにきた」

迎えて、地獄からの使者と化したか神田あすかよ…とりあえず今日はここまで！　次の話にはオレも回復しておきますので…

第十幕 修羅場…勃発！

え、蘭に殴られた頭まだがガンガン痛む訳で…オレが意識不明の重体未遂の状態の時に神田あすかの発言がこれから特にオレへの波乱を呼ぶらしくて…ども、波瀾万丈、武威ムサシがお送りいたします。

「ん、ムサシを迎えにきた」

神田あすかは確かにそう言った。オレを迎えに来たと…？　ん、迎えに来た？何故に？

「迎えに来たって、どこにムサシ連れていく気よ、あすか！」

「ん、決まってんじやんか！僕の本家に婿入りしてもらおうと思っ
て」

「む、婿入り…！？」

オレと蘭は口を揃えて叫んだ。てか叫ぶしかないだろ、急に婿入りしてもらおうなんて言われても困る。まだ会って一日目だぞ、オレ達。

「ムサシ、良かったなみんなに愛されてて」

「翔よ、その無慈悲な言い方を止めてくれ」

このままじゃ愛されてんだか平穏な人生邪魔されてんだかさっぱり分からんぞ、オイ。

「わ、私はムサシの婿入りなんて認めないからね！ぜっ…たい認めない！」

「蘭に認められなくてもムサシは僕の旦那さまになってもらうからねームサシ！」

「い、いや…急に言われてもよ、アハハハハ…ハア…」

苦笑いも最後にやため息に変わる。何なんだ、この展開。どうなんだ、オレ？

「それにさ…」

あすかの顔が裏の笑みに変わる。ただ、まわりの男共の、おおぐな
どと歓声が飛ぶのには理解できない。

「別に蘭とムサシってそんなディーブな仲じゃないんでしょ？」

「そ、そ、それは……」

「ディーブな仲じゃないんだったら僕の邪魔をする理由なんて無い
じゃない、僕はムサシを愛してる。十分な理由でしょ？」

「あ、愛してる？ オレをか……」

いきなり、愛の告白されても困るんだか……

「と、いう事でこれからいつも一緒だからね、ムサシ」

「……めない、認めないわ……絶対に認めないから！」

と怒り心頭の蘭は近くにあった級友Dの机を破壊の鉄拳で真つ二つ
に破壊するとギロツ、とべたべたくっ付くあすかと多分、嫌な顔を
しているのだらうオレを睨み付けた。

「命に換えても……オマエヲツブス……」

「来なさいよ、麻蔵蘭ッ……」

……あつ、これはもしかして修羅場というヤツではないのですか？

三角関係か？……ぶっちゃけ、あんまり巻き込んでほしくないな

あ……

と、言う感じでオレの人生最大の恐怖が本格的に幕開けした訳で……
って、継続系かよッ！

第十一幕 不安の予兆（前書き）

この話からストーリー性が強くなります。シリアスも入りますがよろしく願います。

第十一幕 不安の予兆

さうて、遂に私の出番がやって来たわね！ 待っていたわよ、姉さん天下が！ 天上天下唯我独尊よッ！ ……失礼、興奮してしまったわ。今日は私、武蔵零がお送りするわ。

春つらら…我が家、武蔵家の庭にも桜の花が咲き誇って私に春を感じさせる。

「気が付いたらもう春よ、ナオキ。早いものね」

「…春を感じるのもいいが早く仕事に行け。お前が春を感じてるうちにもう十時過ぎだぞ」

フフフ…と私は縁側で一人怪しく笑う。

「大丈夫よ…今の科学技術の結晶、パーソナルコンピュータ。いわゆるPCがあれば家に居ながら仕事が可能な時代になったのよ！ 科学万歳だわ！」

私は前もって持ってきておいた缶ビールをプシュ、と勢い良くあけて喉に流し込んだ。朝からビールが飲めるキャリアウーマンなんてそうそういないわよ。

「…ああ、ただ単に面倒臭いから家で資料まとめておくって事にしたのな」

「あら、よくお分りで…さすがは長年の付き合いね」

さすがはナオキ。私の考えてる事なんてちゃんとお見通しな訳ね。醒めた顔してよくやるわ。

「とりあえず、あなたも一杯やる？ ちょっと話したい事もあるのよ」

私はちよいちよい、とナオキを手招きした。ナオキは無表情のまま私の隣に座った。

「まあ、とりあえず飲みなさい。……なに嫌な顔してるのよ、あなたイケる口でしょ？」

「だまらっしゃい、酔っ払いが。もうアルコールが回ってきたか？」

「」

「まさか。アルコールなんて私にとっちゃ水よ、もしくは炭酸飲料」
「炭酸飲料な…確かお前炭酸飲めないんじゃないのか？」

「…例えよ、例え！それより話したい事があったのよ。ムサシのクラスに転校してきた子の事なんだけど」

ああ、とナオキは無表情のまま頷く。まったくこれじゃイイ男が台無しよ。長年一緒にいる私だって今でもあなたの美しさには引かれるものがあるのだから。

「ムサシのクラスに転校してきた子思いだしたのよ。神田あすか…神田家の愛娘よ」

「神田家？あの極道一直線みたいな一家か？確かにムサシと仲はよかったと思っただが」

「そう。しかも私のムサシを婿に迎えたいなんて…私を舐めてるのかしら？」

「そう言う訳じゃないだろう。神田家にはあすか一人しか子供がないからな。跡取りにしたいんだろう。ムサシだって武蔵家だ。婿に欲しい家はいくらでもあるさ」

確かにムサシを婿に欲しい家はいくらでもあるはず…我が武蔵家の長男を婿に迎えれば、武蔵家利用しまくれるもの。今は権力をほとんど持つては無いといえ、それほど武蔵家は影響力はあるのよ。

「まあ、ムサシ自身は嫌がってるから今はいいいけど…少し心配だわ」
「何、そういう事に関しては人一倍鈍いムサシの事だ、大丈夫だろうよ」

「それもあるけど…神田家は最近ちと問題事が多いって聞くわ。巻き込まれないと良いけど…」

「…珍しく弟想いの姉らしい発言をしたな」

「あら、失礼ね。私は家族は大事にする方なのよ」

「ほう…それならオレの家事でも少し手伝ってもらうかな、家事想いのお姉さんよ」

「…それはそれ、これはこれよ」

私は空になった缶ビールを持ちながら真つ青な空を見た。清々しく青い空に桜の花は散って、私に再び春を連想させた。

だけれど、私のちょっとした不安は私たちをゆっくりと、そして確実に巻き込んでゆくのだった。

第十二幕　ナオキの一日、そして…

炊事に洗濯、掃除に買い物…世の中の家事担当の人々はまったく大変だな。賢明なる読者諸君も、いつもこの生活が当たり前に思わずに、家事を担っている母、父、そして家政婦（夫）に感謝するのだぞ。

何故、急にそんな事言っているか、って？それは俺が家事の大変さを骨身に感じているからさ。もう誰だかわかったろ？　そう、今回は俺、ナオキがお伝えしよう

ムサシ達の新学期が始まって早々と二週間が過ぎた。零の心配をかき消すように平和な日々、俺も少し春の陽気に浸る余裕が出来たって訳だ。

かとは言っても毎日の掃除洗濯が減るわけでもなく、俺はホトトギスの歌声を聞きながら庭の一角に立ててある物干し竿に洗濯を干していた。

当然、ムサシ達は学校。零も今日は会議があるらしく朝早くに家を出た。ん、零の仕事？　ああ、話していなかったか…零のは意外も証券取引系の仕事に就いている。まあ、アイツは昔からふざけてる割には成績優秀みんなの目標だった訳だから、大学卒ですぐに仕事見つけてそこそこ儲けてるわけだ。

しかし俺としてはそろそろ一ヶ所に落ち着いてもらいたいところだ。アイツももう**歳だからな、早くしないと負け組になるぞ、オイ。かといっても、零も女だ。過去の事を引き摺っているのかも知れんそれが心配だ。もしも、ヤツが戻って来たなら…零も素直になれるのかもな。

洗濯を干し終わると、既に十二時に近づいてきた。あまり俺は腹が減ると言う感覚は感じないのだが、習慣というヤツだ、何か食べな

いと何故かスッキリしない感じがする。とりあえず、パスタでも作って済ましてしまおう。

『た〜らこ、た〜らこ、た〜っぷり、た〜らこ　パスタ』をたらふく食べた俺は次の家事をこなすべく玄関に向かっていった。玄関に向かつてする家事といえばただ一つ。

分かる人は知っている。知らない人はお父さんかお母さんに聞いてみてくれ。

「武蔵さ〜ん！　郵便ですよ〜」

「いつもお世話様です、郵便局の黒ヤギさん」

郵便局の黒ヤギさんから俺は手紙を受け取ると、にこやかな笑みで微笑んだ。一応言っておくが、黒ヤギさんはヤギじゃないぞ。身長177センチ、体重70キロ、フツウの好青年だ。

俺は帰ってゆく黒ヤギさんをに手を振りながら見送ると、早速配達された手紙を眺めた。

「手紙なあ…ん、神田家の本家からか」

神田あすかがムサシの学校に転校してきたのに関係がありそうだな。まさか無許可で転校してきたか、ありえない話ではないな、あの娘なら。

「とりあえず…ややつこしい事にはなりそうだ」

俺は手紙を黒ズボンのポケットにしまい込むと、そそくさと掃除を始めた。

第十三幕 不孝と不幸は何が違うんでしょう？

あゝ、聞こえるか？ テスツ、テスツ…、えゝ、神田家からの手紙を受け取った俺は、零が仕事から戻ってくるのを待っている訳で…ん、棒読み？ 気にするな。今回もこの俺、ナオキがお送りするぞ。

「ただいまあゝ零おねーさまのお帰りよ！」

「ああ、お疲れ」

俺が一人、夕食の支度をしていると、乱暴に家のドアを開ける音と共に零が帰ってきた。頼むから礼儀としてドアは静かに閉めてほしい。ただでさえこの家は古いのだから。

「いやゝまったく疲れたわよ…ナオキ、ビール！」

「帰ってきて早々アルコールを要求するとはいい度胸だな…」

「アルコールは水よ、水！ んもう、いいわよ、自分で持ってくるから」

零は頬を膨らますと、スーツを脱ぎちらかしながら台所へと向ってきた。頼むから服を着ろ。

「ビール ビール！ ビ…な、無い…無いじゃないのビール！」

「ん、ああ…別にその発泡酒でいいだろうよ」

「ダメよ…！ ビールと発泡酒は姿形は似てても中身はまったくの別物よ！ キヤベツとレタスの違いくらいの差があるわ」

「お前にキヤベツとレタスの違いを説明できるのか？」

「…ともかく、買ってきて、今すぐ！ よく冷えたエビスを！」

ハイハイ…と俺は一度言い出したら止まらない困ったわがままツ子に返事を返しながら花柄エプロンを脱いだ。

「それじゃあ買ってきてやるよ。ついでに卵も買ってこないとな…」

ああ、そうだ」

俺はポケットの中を探り、あの手紙を零に手渡した。きょんとした表情を見せるな。お前にだって手紙が来たっておかしい所はまっ

たくないぞ。

「…ついに私にも来たのね…あの有名な不幸のてが」

「違うからさつさと話を進めろ」

「神田家からのお手紙ねえ…出来る事ならこのままゴミ箱に放り投げたい所だわ、まったく」

とは言いながらも零は封筒を器用に破り、中のレターを読み始めた。一体何を書いてあるのやら。

「ふんふん…ほうほう…あ…えっ！……ナオキ、今晚の晩酌中止かも」

「ん、どういう事だ？」

「神田家の当主が今夜、自分の家で宴会開くから来いだって…」

「宴会、なあ…」

「行くしかないわね。ちょうどいいタイミングだわ。あの事も聞かなくちゃいけないし」

「あの事か？…それもそうだな。その神田家主催の宴会は何時からなんだ？」

「ん…今から十分くらい前かなあ…」

「ほお…」

「ふうーん…」

「「確実に遅刻じゃないかあ！！！」」

俺と零は以心伝心、同じタイミング、同じ口調で叫ぶと、俺は鍋の火を止めに、零はまあとりあえず服を着に、反対方向に走りだした。

〳十分後〵

「二十分の遅刻よ」

「神田家までは時速200キロで飛ばしまくれば一時間…ぎりぎりか」

「まあ、遅れた時点できりぎりじゃないんだけど」

零は秘密のオシャレ七つ道具の入ったセカンドバックを引ったくる

ように持つてきながら玄関に早歩きで向かってきた。

「そういえば…ムサシ達はとうする？」

「ああ、置き手紙書いといたわ。何かあったら携帯に連絡するですよ」

そうだな、と俺と零は、零の真っ赤なスポーツカー…確かGT-Rだか何だか忘れたが、それに乗り込んだ。ちなみに運転は零だ。俺はバイクの方が好きだからな。

「とりあえず、出発するわよ」

零はキーを回し、愛車のエンジンを掛けた。…あつ、宴会だよな…
零には飲酒を控えてもらわんと帰れないぞ、オイ…

第14幕 時を止まれッ！ザ…

突然だけど、私はスポーツカーが好き。というよりはぶっちゃけ、爆走出来るものだったらブレーキの無い新幹線でもフル改造の三輪車でも何でもいいのよ。えっ？交通ルール？ あゝ、適度に守ってるから…

自称、スピード狂、武蔵零がお送りするわよ。

メーターは百キロを軽く越して右へ振り切れんばかりまで移動している。まわりの車は何事かと私の愛車を啞然と眺めている。

「お、おい、零…一般道路で百キロオーバーはまずくないか？」

「いいのよ、私が本気出せば警察なんか簡単に振り切れるわ」
「振り切ればいいって問題じゃないぞ」

あなただつてよくナナハンで爆走してるじゃない。人の事は言えないわよ。

神田家まではあと二十分かからないと思うわ。まったく、今からあのヤクザの親ビンと会うとなると憂鬱で憂鬱で…

「零…さつきから後ろで聞き覚えのあるサイレンが鳴り響いてるんだか」

「気のせいよ。耳が遠くなったんじゃないの？ 見た目より年食ってんだから」

サイドミラーを覗き込むとパトカーのホワイトボディが群れを為してたわ。

『その暴走スポーツカー止まりなさい！！ 一体、何キロ出してっと思ってるの！』

「現在、107キロ…まだまだ余裕のよっちゃんよ」

「いや…そういう事を聞いてるんじゃないぞ、警察さんは」

ナオキの忠告を軽く無視して私はアクセルをグクツ、と押し込む。エンジンの鼓動が車に響き渡る。いい音色だわ。まるで母の心音を

胎内で聞いているような、そんな音色。

「ナオキ、シートベルト締めた？頭打っても知らないからね」

「お、おい！？ 一体何する気だよ？」

「音速の壁を超える…」

「…音速って秒速何メートルだか知ってるか？」

「30メートルくらいじゃなかったけ？」

「その十倍近くあるぞ音速ってヤツは…」

私はまたナオキの発言を無視し、踏めるだけアクセルを押し込んだ。グツ、と重力が身体に掛かる。

「凄いわよッ、ナオキ！ メーター振り切っちゃってる！！ 250キロよ！ 信じられる？」

「出来ることなら信じたくない…」

「それなら夢だと思ってて」

後ろの警察さんはすでに姿を消した。まわりの車が止まってるように見えた。そう、これはまるで…

「ザ・ワールドよッ！ DIOになった気分だわ！」

「危険なネタは止める。あとで何言われるか分からん」

「誰も私を止められないわよ！最高に『ハイ！』ってヤツよ！」

「分かった、分かったから畳み掛けるな」

こうして私は神田家に向かって爆走するのですた…ああ、快感

第十五幕

波紋疾走…危ないネタだな…

byナオキ

今回は俺が話そう。あゝ、何？ 今の状況を知りたいと…いや、別に困ることもないのだが…誤解されてしまうのではないかと少々心配だ。けど知りたい？ …しよがないな。簡単に言い表わせば…真つ黒服着た少し人相良くない男どもに囲まれてる。…状況が分かったか、そりゃよかった。

と、いう訳で神田家に着くや否や、殺気漂うスーツ姿の男どもに囲まれてる俺と零であつたが、

「いやゝ大層なお出迎えねえ…参っちゃうわ、まったく」

と、この女はまったく危機的状況を飲み込んでいないらしい。どっから出てくるのだ、その余裕は。

「で…その道、空けてほしいんだけど？」

「お断わりいたします。どこの誰とも知らない馬の骨を神田家に入れる事などできません。どうぞお引き取りください」

言葉遣いは丁寧だが、実際の口調は殺気に満ち溢れている。とはいってもこの女にはそんな生半端な殺気じゃ効かんぞ、ヤクザのお兄さん。

「んなこと言われても私たち、今日あなた達の組長に招待受けてるんだけど…聞いてないの？」

「そんなデタラメ一切聞いておりません、早々にお帰りください」

「…ナオキ、どうする？あの馬鹿親ビン、私たちが来る事忘れてんじゃないの？」

「そうだな…すまないがお前のボスに聞いてきてくれないか？タケクラの客人が来たと」

「くどいッ！これ以上ここにいて言うならぶつ殺す！」

急にキレはじめたぞ…カルシウム不足か？牛乳を飲め、牛乳を。

「あらゝぶつ殺すなんて汚い言葉使っちゃって…おねーさんシヨッ

クだわ。坊やは牛乳飲んで早く寝なさい、私たちは坊やたちのボス、神田鉄に用があるのよ、邪魔しないで」

「…おい、おまえら…手加減しなくていい。バラバラにしちまえッ！」

幹部Aの掛け声で十数人のヤクザのお兄さんが俺と零を囲み始めた。まったく血の気の多い奴らで困る。

「ナオキ、なんだか楽しい事になってるんだけど… やっちゃっていいと思う？」

「…少しお教えてやれ、誰を相手にしてるかな」

そういうと零はニツ、と笑い指の骨を鳴らし始めた。零のストレス解消間違いなしだな。可哀想なヤクザのお兄さん。

「かかってきなさい、こてんぱんにしてあげるわ！」

「やっちまえッー！！」

零目がけ木刀を振り回している男を零はひらりと避け、脇腹にストリート。ああ、痛そうだな。そのまま零は左右の男の顔面に肘、拳を浴びせ、立ちふさがった男の腕を取り、曲がってはいけない方向へ回転させる。これが、関節技というヤツだな。

「こ、この女アアア！！」

「あらあら…隙がありすぎよ、お兄さん」

降り掛かった拳を右へ受け流し、がら空きの顔面にグーパンチ。ああ、見てられん。まるで子供の喧嘩に乱入してきたプロの格闘家みたいな感じだ。

「この女、強い…石垣さん、頼みます！」

「オウ、俺に任せろ」

なんだか強そうなスキンヘッドのお兄さんが出てきたぞ。手には金属バット。大丈夫か、零。

「ナオキ、アレで決めるわよー！！」

…危機感を少しは持ちなさい！相手に失礼だろうが、それじゃあ！

…まあ、とりあえず、例のアレか？

「死ねー！くそ女ッ！」

「隙がありすぎ　ひらりッてね！」

相手の振りがぶった金属バットを綺麗に避けると零は石垣さんの懐に入り込む。そして俺は零の後ろでスタンバイ。

「オラオラオラオラッ！！　あなたを裁くのは私の『スタンド』よッ！！」

ゴゴゴゴゴッ…

「オラオラオラオラオラッ…ふう。オラオラオラオラオラオラ…」

スタープラチナ、もとい、俺はノリノリの零の指示の下、石垣さんに一秒、五発の拳を打ち出してゆく。すまない、石垣さん。

「…で、まだ歯向かう気？」

「ごめんなさい、もうしません」

仁王立ちした悪女の前にひれ伏す黒服のお兄さんをあの悪女はフツ、と笑い飛ばす。ん…やはりサゾっ気だな、こいつは。

「で、鉄とは確認したの、下っぱA？」

「いたしましたっ！姐さんっ！どうぞ、こちらにどうぞ」

いつまにか姐さんに格上げされた零…鼻高々だな、この女。

「あら、ナオキ！早く来なさいよっ！」

「ああ…」

十数人の黒服に囲まれた零の後を俺はゆっくりと付いていった。

第十六幕 零と鉄と交通法と

前回、俺と零は余裕かましながら総大将の兄ちゃんを例の『オラオラッ』で倒し、ボス戦：じゃなかった、神田家の親ビン、鉄と会うことになったんだな。

さて、最近、出番が多いナオキがお送りしよう。

「ある〜日」

「「ある〜日」」

「家のなか〜」

「「家のなか〜」」

「鉄ちゃんに〜」

「「親びんに〜」」

「出イ会ったツアアア〜!!!」

…さつきから零始め、零の舎弟となった黒服のお兄さんたちの二部合唱が続いている。と言うか最後のオペラ風の歌い方は何なんだ、いったいどこで身につけた？

「零、一応俺達は招かれてやってきてるんだから少しはおとなしくしろ」

「ハ〜イ、ハイハイ！ 分かったわよ。さすがに森の熊さん・イン神田家バージョンを歌ったのは反省してるわ」

「反省するなら猿でも出来る」

「あら、日光猿軍団と同じにしないでくれる？ 私、猿は超えてると自負してるんだけど」

「当たり前だろっ！ 猿くらい超えないか！」

「けどね…動物奇想天外とか見てるといつかは抜かされるんじゃないかって心配なのよね、猿に」

「猿にな…」

そんな他愛の無い話をしていると、いつの間にか何やら龍の描かれ

た豪華絢爛屏風の前に来ていた。少し悪趣味だな。

「……てええええつううい！！」

「な、零！？ どうした？ というか勝手に乗り込むな！」

何故か怒り心頭の零は屏風を吹き飛ばさんばかりに、いや、訂正。すでに吹き飛ばしていた。

「鉄ちゃん！ 私は怒ってるわよー！」

いや、怒る意味が分からん。今まで猿について語ってたではないか。しかも屏風は掌打で思い切り吹き飛ばしたな。龍の顔面部分に風穴が開いたぞ。

「おう、零ッ！ どうした？ 顔が怒ってるぞ！」

部屋の奥にいたのは屏風ごときじゃ微動だにしない屈強そうな人物。あれが神田鉄。神田家を率いるヤクザの親びんだな。ヤクザの親びんらしく、見た目は筋肉質のちよい悪おじさんだな。

「鉄ちゃんッ！ 久しぶりね、何年ぶりかしら？」

「んー、五、六年ぶりってとこだろうよ、んなことよりおまえも飲めッ！」

「あら、ありが……じゃないのよッ！ 何あなた自分から招待しといて出迎えにこないのよッ！ あなたの部下に勘違いされて大変だったんだから」

本当に大変だったのは、とぼっちりを受けた鉄の部下だ。

「おう、それは悪かった。いやー、いい酒が手に入ったから一緒に飲もうと思ってたんだがな、すっかり忘れちまったよ」

ガハハッ、と豪快に笑う鉄に零はため息を吐きながら出された一升瓶の酒を、いつのまにか持っていたコップに注いでいた。

酒となると行動が早いな、おまえは。

「おっ！？ ナオキじゃねーか、元気してたか？ とりあえず、お前も飲め」

「ご無沙汰していますね、鉄殿。俺は帰りの運転が強制的に決定したので酒は遠慮させていただきます」

「運転だあー！？ そんなの酒飲んでも出来んだろうが！」

「あの…有名なことばを知ってますか？『飲んだら乗るな、乗ったら飲むな』と…」

「ああ、知ってるぞ、飲みながらの運転はよ、こぼすからやめとけてヤツだろ？ツボついてるよなあ、俺も一回ハンドルにチューハイこぼしてよ、あとからベタベタになっちまって」「…なるほど、そういう捉え方もあるか」

「…妙に納得してしまった。そういう想像力は天才だな、馬鹿ってヤツは。やはり零と同種だな、鉄も。」

「…何、もう時間切れだ？　しょうがない作者め。」

次はムサシサイドだな。最近さっぱり出てないからなあ…暇してるだろ。

賢明なる読者の諸君、たまにはムサシ達にもかまってやってくれ、こっちはこっちでどうにかするさ。

第十七幕 序章の鐘は鳴り響く

あつ、どうも。かなり久しぶりで…いやはや全く、本気でオレはこのまま出れないと思った訳で…そして零ねーちゃんとナオキの話をしていた頃、学校では犯罪が起こったりした訳で…
こんにちは、久しぶりの登場、武蔵ムサシです。

「で、ムサシ…結局どっちにするんだ？」
「何がだよ…」

この質問もさすがに聞き飽きた。まったく、翔の頭の中は女と機械の事で九割占めてんじゃないかと本気で思ったりした。

あすかが転校してきてから早、一カ月。あすかもようやく学校に慣れてきた感じだな。元々モデルとかグラビアもしてるみたいだし認知度は高かったらしい。

「いや、あすかちゃんは有名人だぞ。写真集だってバカ売れしてるしよ」

…詳細ありがとう、翔。頼むからこれ以上、オレのハートをウオツチングするのは止めてくれ。下手な事考えられんではないか。

で、ウチの蘭とは言うと…

「…おもしろくないわ」

「ら、蘭…どうしたのよ、そんな般若みたいな顔して…」

「おもしろくないのよ…まず、あすかが転校してきたこと。これが始まりだったわ」

「けど私はあすかちゃんはいいい子だと思うけど…」

「あすかは悪い子じゃない事は私が一番よく知ってる。けど、本能が訴えかけるのよ、あすかに近づくな…みたいな事を」

「近づくな…ねえ」

蘭の親友、渚ちゃんと向かい合いながら話す蘭の表情は暗い。あすかが転校してきてから蘭は疎い表情ばかり浮かべているな。

しかし…渚ちゃんも第五幕ぶりの登場だったな。これから目立ってゆくタイプか？翔よ、立場が危ないぞ…

「そういえばさ、蘭とあすかちゃんとムサシ君って昔は仲良かったんだよね？」

「昔はね…いつからだろう、あすかが敵に見えてきたのは。昔から私よりも可愛いし、皆から愛されてた。何をしたって勝てなかった…いつでも私よりも一歩先を行ってたのよ。今じゃ負けてないのは胸の大きさくらいよ」

「女の私から見れば二人ともありすぎよ。羨ましい限りだわ」

「いや、これもなかなか不便でね…肩凝るし、正直…邪魔」

「蘭、それは贅沢な悩みよ」

……まあ、今のところは蘭も大丈夫か。実際、あすかは蘭の事を毛嫌いしてる訳じゃないらしいし。意識しすぎなんだよ、蘭のヤツは。…ムサシ、やっぱりお前ってのはあんな美女ふたりから愛されてるんだな」

翔が問い掛けてくる。オレはまさか、と首を横に振った。

「愛されてる訳じゃないさ…ただ、お互いいつも一緒にいたんだ。

それが普通だった。欠かせなかったんだよ、昔は。あすかのあの発言は本心か分かんないけどよ」

「やだねー、鈍い男って…」

「ん、何か言ったか、翔？」

「いやいや、別に…ムサシ、ある意味お前は幸せもんだよ」

「幸せねえ…幸せっては何だよ？」

「ん、幸せか？ 機械に囲まれて…」

「もういい、お前に聞いたオレが馬鹿だったわ」

なんて、たまに真面目な事を考えていた最中、マンガチックな恐っ

ろしい、事が起こる訳で…また次話であいましょう。

…うん、最後まで真面目だわ、オレ。

第十八幕 渚ちゃん秘密能力…いや、コメディだし…

前は真面目な感じなオレでしたが…えっ、そうでもなかった！？
些かシヨツクな武蔵ムサシがお送りいたします…

と、いうことであつという間に放課後になりました。教室で友達と喋っている者、部活に勤しむ者と、放課後の使い方は色々あります…

「ムサシ、一緒に帰る？」

ちょうど、オレが帰り支度をしている時、渚ちゃんと一緒にいた蘭がオレの肩を叩いた。

「ん…、一緒に帰るか」

別に断る理由もなく、放課後の予定もないオレは、ぼろぼろになった通学カバンをひよい、と片手に携えると、最近、習慣になりかけている、

「…あすかはいないな？」

と、いつもの台詞を吐きながら、辺りを見回しながら蘭たちに尋ねた。蘭はうん、と頷く。

「気配ゼロ。珍しいわね、ムサシの近くにいないなんてさ」

「確かに、いつもなら、そろそろ飛び付いてきてもいい頃合いだよな」

うんうん、と二人で頷き合っていると、渚ちゃんは何かを思い出したかのようにポン、と手を叩いた。

「そつえば、私…あすかちゃんが急いで帰るところ見た…ような気がする」

「あすかが急いで帰るねえ…さっぱり理由がわからない。蘭、何かを心当たりは…」

「知らないわよ。けど、確かにそついわれると今日は落ち着き無くそわそわしてたわね」

そうだったか？と、今日、一日を振り返ってみたが、確かに、いつもと比べればあすかは元気というか、覇気がなかったように思える。この際、思っておこう。

「けどよ…あの人工太陽みたいに明るいあすかが元気無くなることってなんだ？さっぱりわからん」

「私よ。とりあえず学校からでようよ。帰り道、襲ってくるかもしれないから」

「そりゃそーだ」

とりあえず、帰る事にしたオレと蘭と渚ちゃんは、ちらり、ちらりと向けられる一人身の男子どもの視線を感じながら、昇降口へとむかった。

いやな視線だな。お目当ては蘭と渚ちゃんだろうに。なかなか美人で有名な二人からな、この二人は。

そんな二人と帰れるオレに向けられるのは、

『妬み』

『恨み』

『羨み』

くらいなもので、目で犯されぬならぬ、殺されそうになる。いつかメデューサーの子孫に石にされるのではないかと、不安に思ってるのはここだけの話だ。

「あつ、見てムサシ！ あれ、あすかじゃない？」

オレ達はあすかを搜索しながら…少なくとも、オレは会いたくはなかったが、ぶらーり、ゆらーり、と駅辺りを彷徨っていると、蘭がいきなり耳元で叫んできた。

「ん…おつ、確かにあすかだな」

「駅でうろついてるだけか…私たちの取り越し苦労だったのかもね」

「けど、フツー、一人でうろつくか？一応、アイツはアイドルだぞ？」

「大丈夫よ、こんな田舎の駅にナンパするほど度胸の座ってる奴はいないわ」

確かに。田舎にナンパ野郎なぞほとんどいない。いたら、いたで珍しがられるだけだ。

「ちよつと…蘭。さつきから私の『運命の五本系』（ザ・ファイブストリングス）にここら辺じゃ感じない物体を感じるんだけど…」

説明しよう。この渚ちゃんは小さな頃からこの『運命の五本系』の能力、いわば超能力を持っているのだ！零ねーちゃんにいわせれば…

「それ、絶対『スタンド』よ！」
との事らしい。

辺りの人を感じれるこの『スタンド』…便利なんだかイマイチなんだか。あつ、ついでに言っておくと、零ねーちゃんも自分で、スタンド持つてるわよって言ってたから何かしら持つてるらしい…恐ろしいねーちゃんだな、オイ。

「ここら辺じゃ感じない物体？ 何それ？」

「なんというか…雰囲気が違うっていうか、なんというか…言葉じや上手く言い表わせないんだけど」

「雰囲気が違うねえ…どう思う、ムサシ？」

蘭がこちらを振り向く。俺にそんな事聞い　ても解決策は浮かばんぞ。

うし、次へ続く！

へっ！？切れ目が適当だ？…作者に聞いてくれ！

第十九幕 私のこの手が光って唸っちゃう

あゝ、渚ちゃんの特異能力やら『スタント』なんだかわからない力によって、あすかの周りに不穏な影がある事を知ったオレ達は、これからこの事を模索する訳で…

一般庶民、武蔵ムサシがお送りします。

「で、どうすんだよ、これから。もしも、渚ちゃんの感知してる黒服に「ちゃん」があすかを狙っていたとしても、それを阻止する権限はオレ達には無いぞ」

「確かに、ムサシ君の言った通りですわ。あちらが何か仕掛けられない限り、私達は何も出来ません。ただ…」

ただ…？ と蘭が聞き返す。うゝむ、この時の渚ちゃんの曇った表情もまたいいねゝ！ 何か、男心をくすぐるというか、なんというか…ただ、やっぱり渚ちゃんのような美少女には笑顔が一番にあつてるけどな、うん。

「ただ…あすかちゃんの周りに徐々にあの集団が集まってきたんですよ。しかもここは人通りの少ない裏路地。何か起こすにはもってこいの場所ですわ」

「確かにそうね…まったく、あすかのおかげで大変なことになってきたわね」

まったく、とオレは頷く。始まりといえばあすか搜索だったというのに、気付けばこんな物陰に隠れてドラマチックな展開になっているなど、まったく思いつかなかった。

「これであの連中がただの慰安旅行で集まってる…みたいだったら助かるんだけどね」

「慰安旅行だったらな…取り越し苦労に終わるならどれだけいいか…」

「残念だけど、慰安旅行ではないらしいわ。ムサシ君、蘭、あれを

見て…あすかちゃんの後ろを歩くあの数人の男、あの怪しい集団の一部よ」

渚ちゃんの視線の先にはあすかの後ろを少し距離を置いてだが、歩く黒服に「ちゃん達の姿が。あすかも薄々は感付いているらしく、後ろを振り向き仕草をしきりにしている。まあ…振り向いたら、ましてや、奴らと目でも合ったりしたら…何かが起こることくらいオレでも分かる。

「で、どうする？ わざとらしく登場して引き離すか？」

「それも一種の手だとは思いますが。けど、問題はそれで相手がどう行動に出るかです。数ではあちらが勝っているし、暴力沙汰は…」

「後々やばいよな、暴力は…恨み買いたくないし」

「じゃあ…どうします？ 何か有効に、かつ円滑にあの黒服達をあすかちゃんから引き離す方法を考えなければいけませんわ」

だな、とオレと蘭は頷いた。こんなところで問題は起こしたくない。起こせば後々何かと厄介になるのは避けたい、ああ、避けたい。

「…でも、今は自分達のことを考えなければいけないようすわ」

「ん、渚ちゃん、それはどういうこった？」

「囲まれてますわ、私達…左右に三人、後ろに四人」

嘘ッ、と蘭は左右を振り向いた。オレも後ろを見たが人影はない。

距離がまだ遠いのか、それともあつちが隠れているのか、敵が分かるのも渚ちゃん様様だ…あつ、まだ敵とは分からないか…

「どうするの？ これじゃあすかまで手が回らないわよ！あすかを助けに言ったとしても、一人で、しかも左右に後ろ、七人相手にはできないわよ。二人でもいいっぱいいっぱいだわ」

「戦うつては蘭と…渚ちゃん？」

違うわよっ！ とオレは蘭のゴッドフィンガーで顔面を掴まれた。

「私とツ、あ・な・た・よッ！ムサシくんよ！」

「イデデデッ！ が、顔面が、顔面がああ！」

「分かった？ 分かったら返事ッ！」

「は、はひ…」

よろしい、とオレのビューティフル顔面から手を離した蘭は、よし、とバキ、メキと指を鳴らした。ヤル気満々なのがいいが、相手かなんにあれ戦うつもりなのな、この娘は。

先程、渚ちゃんと暴力沙汰はいけないと話したばかりなのにな。

「渚、相手の距離は？」

「あと200メートルくらいかなあ…あすかちゃんとも少し離れちゃったし」

「それじゃあ、まずは周りの敵を倒してあすかを追い掛けましょう」

「おい、蘭！　こちらから仕掛けるのは無しだからな、というかこの際、暴力禁止だ、禁止！」

「じゃあ逆に聞くけど、この状況、どうやって抜け出すのよ。私だって無駄なケンカなんてしたくないわ」

「…嘘つきが」

否応なしに蘭の左手、シャイニングフィンガーに顔面を掴まれた、身悶えるオレ。

オレは別に真実を言ったままであつて、蘭をバカにしよう、とか貶してやるうとかいう気持ちはまったく無い。

ただ、真実を言っただけ。

まったく…自分に不都合な真実を認めないなんて…。我が儘なや…
…つイイイ！！！！

メキッ、

ミキッ、

ゴギッ。

つ、続く……

第二十幕 ゲーマー蘭と…黒光り（前書き）

二十話までいかせていただきました。これも親愛なる読者様のおかげです。これからもよろしく願っています。

第二十幕 ゲーマー蘭と…黒光り

え〜と…私のシャイニングフィンガーでムサシの顔を砕いた私こと、麻蔵蘭ですが、周りには敵がうじゃうじゃいる訳で…

「ちょっと、その格好のいいお兄さん達」

私は単身、後ろの四人を潰す…じゃなくて、邪魔にならないように拳と拳で語り合うため、物陰抜け道を駆使し、四人組の背後に回った。背後に回るのに体力使っちゃったわよ。

「あッ？ 何か用か、ねーちゃん？」

四人組の一人…ここではハゲとでも言っておくと、そのハゲが威圧感を漂わせながら私に近寄ってきた。

「いや〜別に対した用って訳じゃないんだけどね…」

私は満面の作り笑いを浮かべながら、手をぶんぶん振り、否定しく。ホントは用ありまくりなんだけどね…

「あッ？ ナメてんのか、ねーちゃん。極道ナメんじゃねーぞ！

ゴラ！」

「ナメてんに決まってんじゃないの、タコの八ちゃん！」

「この〜アマ…痛い目に遭いたいらしいな！」

「何よ、私とやり合う気??」

ああ、いいわ〜、このコメディ的な急展開。マンガチックな場面…悦の極みよ

「おい、ねーちゃん…相当痛い目に遭いたいらしいな…俺は女でも手加減できねーぞ」

「そのコトバ…そのまま返すわ。私も男相手に手加減できないかも」
ブワッ！と四人の殺気が私を通り抜ける。さすがはケンカのプロ。

殺気の出し方がチンピラとは違う違う。

「覚悟はいいか？　ねーちゃんよ？」

「いつでもゴング鳴らしていいわよ」

タコのスキンヘッドにあからさまにムカつきマークが浮かび上がる。

その瞬間、

私の可愛い顔面目がけて大きな拳が空を切り裂きながら向かってくる。

そう、向かってくるだけ。

ハエが止まっちゃうわよ、全く…

「麻蔵家、初伝…葛切り…」

私はハエの止まっちゃいそうなその拳をひよい、と避け、タコの懐に入る。

これが初伝、葛切り。

「懐、がら空きよ、タコさん」

タコの結構鍛えられてそうな身体目がけ、拳を放つ。痛かったのか、呻きながら頭を垂れるタコに私は待ってましたと、ぐっ、と足に力を入れる。

「ゲーマー歴十五年、麻蔵蘭が見せるはストリートファイター、ケンの十八番！」

前足を一步出し、身体を上へと捻りながら拳を突き立て真上へ舞う

…これぞ！

「昇龍拳ツッツ！！」

ケン直伝、昇龍拳はタコの顎にのめり込み、タコの脳天を揺らす。まずは一人。

「一人…次は？」

ドサツ、と地面へ倒れこむタコに恐がったのか、怯むあと三人の黒服。こんなかわいい私に怯むとこなんてないわよ。

「来ないなら、こっちから行くわよー！」

怯む三人の内、一人にターゲットを絞り、私は片足で飛脚、宙を舞う。

ここまで言えば分かるわよね、アレよ、アレ。

「竜巻旋風脚ウウウ！！」

「なぐはッ！」

顔面に私の定価三千九百八十円のスニーカーがのめり込んだ、黒服。あとの二人は…さすがにもう逃げ腰ね。情けない…

「どうする？ 降参？」

「…頭来た」

「へっ？ 何言ってるの？」

「お前…許さない」

今までびびってたはずの黒服片割れの空気が急に変わる。ううう、嫌な予感…

「二人の仇、俺が、打つ…」

「その喋り方…いやな予感しまくりだわ」

私が少し後ずさると、その片言男は懷から、何やら黒光りする金属性の重量感漂うアレを取り出した。

あうう、嫌な予感的中…

「プロを、怒らせる、それ、命知らず」

片言男は明らかに殺意の視線を銃口と共に私に向け、その引き金を引いた。

第二十一幕 渚ちゃんとムサシの奇妙な会話

あゝ、同じ頃、オレと渚ちゃんの二人は残りの恐いお兄さんを待ち構えてる訳で…最近、おもしろい事してません、武蔵ムサシです。

「渚ちゃん…一つ聞いていい？」

オレは、さっきから指先をチヨコチヨコと動かしている渚ちゃんに話し掛けた。

「その指の動きは何よ？」

「これですか？ これは私の『運命の五本糸』を操ってるんですよ」

「ほゝん」

「…余裕だね、ムサシ君」

まさか、とオレは苦笑いを浮かべる。背中のシャツ冷や汗でびつしより、唇はカラカラ、誰かどう見ようと緊張しているじゃないですか。

「けどさ…」

渚ちゃんがため息を吐きながら、オレを見る。

「どこで道を誤って、ここにいるんだろう」

「オレにも分かんないよ…だんだんコメディから道を外れてる」

「いいのかなあ…」

「んゝ、いいんじゃない？」

実際、オレは渚ちゃんと話すネタが無い。いつもは蘭とか翔というネタ提供者がいるから会話が弾むもの、オレと渚ちゃん二人きりじゃ、さっきの会話が精一杯…

「そういえば、ムサシ君…蘭とは上手くいつてるの？」

「は、ハイ！？」

な、なんつう事を突拍子も無く言い始めるんだ、渚ちゃん！急すぎて変な返事を返してしまったではないか！

「いや、最近二人でいる事が少ない感じがしてさ…あすかちゃんが

来てから蘭、押され気味でしょ？」

「ま、まあ…確かに…って！ オレと蘭はそんな関係じゃないから！！ ただの幼なじみだって！ 幼なじみッ！」

「ムサシ君はそう思っても…周り、そして相手が自分と同じ考えとは限らないわよ」

「へっ？ どういう…」

オレが、そう言い掛けると、渚ちゃんは満面の笑みを浮かべながら、人差し指でオレの唇を塞いだ。

うっ、可愛いわ…渚ちゃん…

「ムサシ君、そろそろ恐いお兄さん達がやってきますよ。それと…」
「それと？」

「あすかちゃんの行方が分からなくなっていました…」

「行方がわからない！？」

オレは、左右を振り向きながら渚ちゃんに聞き返した。あすかがいなくなってしまうてはここにいる理由あらず。恐いお兄さんと戦う必要全くあらず。

「まさか…連れ去られたって事はないよね？」

「完全に否定はできませんわ。私の能力じゃ居場所しか分かりませんから…何があつたのかは…」

「と、とりあえず…蘭に知らせてここを逃げよう！ あすかがもしも誘拐されたなら、零ねーちゃんだって動いてくれるし…」

「まずは退きましょう…、とりあえず、蘭を迎えに行かなくては」
おう、とオレを返事を返すと、渚ちゃんと共に蘭がいる筈の後ろへと全力疾走、波紋疾走で走り去った。

第二十二幕 蘭はいつ石の仮面を見つけたんでしょうか…

ぶっちゃけ、逃げることにしました。武蔵ムサシと愉快的仲間たちです。

え、前回。すでにあすかが居なくなっていたことに気が付いた、うっかりな仲間たちこと、オレと渚ちゃんは、零ねーちゃんに話を聞くべく一旦逃げることにしました。

が、

もう殺る気満々で飛び出していった蘭を迎えに行かないと行けない訳で。

…怪我とかしてないといいけど。

恐いお兄さん達が。

「渚ちゃん、蘭居た？」

「前に恐いお兄さん達がすっかりいるじゃないですか！数百メートルしか距離無いんですから見えますよね？」

と、渚ちゃんに突っ込まれながら蘭と恐いお兄さん達の所へ走るオレでしたが、

「ああ…遅かったか」

と、目の前に転がる死体…じゃなくて、疎いお兄さん達が痛々しく横たわっていた。

「二人だけですな。あとの二人は…？」

「奥…だよな？」

辺りを見回してみたが、ここら辺は異様に入り組んでおり、先は奥まで進まんと分からない状態になっている。

「いやだなあ…一犯罪犯した後だつたら」

「そうじゃないことを祈りましょうか」

オレと渚ちゃんは、蘭目指して角を左に右に、右に左に、右かと思つたら左に、左と見せ掛けて右にと、路地を抜けると、

行き止まりでした。

「…あら？」

「…あら？　つて、どしたのよ渚ちゃん！　スタント不調？」

「いえ…確かにこの先に蘭がいるはずなんですが…おかしいわ」

「もしかしてさ…そのスタント、最短距離しか表さないって事はないよね？」

途端、渚ちゃんが視線を逸らした。オレが合わせても視線を逸らす。

「渚ちゃん、まさか…」

「…すいません、役立たずで」

「やっぱし…」

オレはへこむ渚ちゃんの肩をポンツ、と叩くと、どうしたもんだかと目の前の壁を見上げた。

「登る訳には行かないよな…さすがに」

「さすがに直角はよじ登れませんか…ハア…」

「かといって抜け道があるわけじゃないしなあ…」

「壊せる厚さじゃありませんし…ハア…」

「渚ちゃん、もう溜め息吐かなくてもいいよ。正直、オレまでへこんできた」

「いや、この方が反省しているように見えるかな、って思つて」
たまにキャラが壊れる渚ちゃんをほつといて、オレはんぐ、と唸る。

さっぱりいい方法が思いつかない。

「とりあえず…来た道戻らない？」

アレは天使なんかじゃありません。絶対ありません。もしも天使なら、

「貧弱ウ！」

なんていうコトバは使いません。

こんなコトバ、使うのは時を止められるあの方しかありません。

「あつ、起きた！」

「デユ…じゃなくて蘭か…」

「しかしムサシさんも災難ですね。蘭がラッシュで破壊した壁の下敷きになるなんて」

「やっぱりあの無駄無駄ラッシュは蘭だったのか…」

「ゴメンねームサシ！迎えに、それに向こう側の壁の下にいるなんて全く知らなかったからさ」

そりゃそうだ、とオレは所々が痛む身体を起こすと、蘭を見上げた。

「…で、一犯罪犯した感想はどうだ？」

「大丈夫よ、死んじやいないから」

「…なあ、蘭。傷害罪って知っているか？」

アハハ〜と、笑う蘭の向こうの先にはスタントラッシュによって、ぼこぼこメチャメチャになっている黒服さんが。

「…とりあえず、零ねーちゃんに電話しよう。あすかが居なくなっただのは本当に事件だ」

「あすかが誘拐ねえ…」

オレは壊れていないことを祈りつつ、ズボンのポケットを探ると、共に生死をさまよう戦場を潜り抜けた携帯が。

「んじゃあ掛けるぞ」

呼び出し音が少しの間続き、携帯の向こうからナオキの声が聞こえたのはすぐの事だった。

第二十三幕 この遙かなる月の世に

全国津々浦々の皆様、久しぶりだな。酔い潰れた二人に呆れ返っているナオキだ。

とりあえず、今はこの二人は放っておこう。これからが忙しくなるはずだからな…

チャチャーチャラン、チャーチャチャチャチャ…

月の光で照らされた酒の臭いが漂う密室内の壁により添いながら、零の家族用・着信音である

「哀・戦士」

が鳴り響く零の携帯電話をオレは取ると、誰からだ？と光るディスプレイを確認する。

『着信…私の愛するマイ・ブラザー』

…ああ、ムサシの事か。

俺は携帯の受信ボタンを押して、

「もしもし」

と受話器の向こう側にいるはずのムサシに話し掛ける。

「あれ、ナオキ…零ねーちゃんは？」

「零か？ ああ…そこで珍しく酔い潰れてるよ」

俺は苦しいほど酒臭い室内を換気するために月が綺麗に見える大きなガラス窓を開ける。

フウ…と、夜の匂いがゆっくりとした夜風と共に運ばれてくる。

「零ねーちゃんが酔い潰れてる！？ よく、家でそんな事許したね」

「いや、実はな…ここは自宅じゃないんだ。神田…神田あすかの父に宴会に誘われてな、今はそっちにいるんだ」

そう、とムサシの声色が低く落ちる。この状態はアレか、ムサシが焦っているか、落ち込んでいるかのどっちかだ。

「どうした、ムサシ？ 神田家にも興味湧いたか？」

「…されたんだよ」

ん、とオレは聞き返す。思った以上に聞こえない。

「実は、あすかが放課後から行方不明で…そして…」

「…大体事情は分かった。今、どこだ？家じゃないんだな？」

「うん、あすかを追って駅の裏路地まで来たんだよ、そこで、渚ちゃんが怪しい集団が周りにいるって言い出して…」

「怪しい集団…だと？」

ムサシの話で、俺はようやくここに呼ばれた理由が初めて分かった気がした。

神田鉄は感付いていた。

単身、ムサシに会うために飛び出していったあすかを狙う者達がいると。

「その怪しい集団が誰だか分かるか？…というか些か起こしてないだろうな？」

「やつぱりまずかった…よね？」

「…お前達、当分、夕食は白米と梅干しの種だけだな…怪我しなかったか？頼むから無茶は止めてくれよ」

「…ゴメン、ナオキ」

全く…とオレは頭を掻く。これで家にいちやもん付けられても文句は言えん。

「…分かった。ムサシ、とりあえずお前たちは家に帰れ。渚も今日は家に泊まってもらえ。何かあった時は…お前と蘭で渚だけは守るんだぞ。家の問題に巻き込ませるなよ」

「うん、分かった…ナオキ達は？」

「とりあえず、零と話し合うさ。じゃあ切るぞ、今からバケツに水を汲んでこなければならぬからな」

俺は一方的に電話を切ると、ようやく酒臭さが抜けてきた室内で、

「…で、どっから聞いてた？」

と、呟いた。

「ムサシが私に会いたくてたまらな」

「いつ、そんな話したんだよ」

俺は振り向くと、すでにアルコールが抜けたような、ついでに気も抜けたような顔つきの零が座っていた。

「まさかそんな理由でここに呼ばれるなんてね…薄々分かってたけど」

「で、どうすんだよ？ 無駄な争いなんてしたくないぞ、俺は」

「…私もよ。私のすべすべお肌にキズでもつけられちゃたまったもんじゃないもの。けど…」

けど…？、と俺は聞き返す。

「ただ酒飲んじやったから…協力しないでいけないわよね」

「…まったく、誰かさんが酒好きじゃなければこのまま帰れるんだが…？」

「酒好きはおじいちゃんのおじいちゃんからの遺伝よ、私に罪はないわ」

ハイハイ、と俺は何百回と聞いた言い訳に苦笑すると、零もクスクス笑っていた。

「全く、誰がこんな災難引つ張ってくるんだか…」

「零、罪を自覚しないことが本当の自分の罪って事、知ってたか？」

「

…さあね」

零は、笑いながら、鉄の横にあった日本酒をコップに注ぐと、景気酒よ、と一気に飲み干した。

第二十四幕 零の酒事情

あゝ、最近では男性より女性の方が権力を保持している事は明らかだ。特にこの零を見ていると、日本が再び、邪馬台国の様になるのもそう遠くないのかもしれない。

まあ、この俺、ナオキはとつくの昔に慣れたけどな…

なぜ、俺が急にそんな事を思ったのには理由がある。

「こらゝ！ 起きなさいよ、この酔っぱらいオヤジ！」

「フガー……！ むにや…」

「意味不明ないびきかいてるんじゃないわよ！」

空になった日本酒の瓶を抱きながら可愛いんだかうるさいんだか分からないいびきを起てる神田 鉄に零は容赦なくその脇腹のローキックを放つ。

「なんで私に飲ませたあなたが私より寝てるなんておかしいでしょうが！ 男だったら、女酔わせて夜這いでしょうが！」

「何、お前も酔った拍子に危なっかしい事口走ってんだ」

俺はローキックから二ードロップに移行している零の首根っこをひよい、と掴み、持ち上げる。

「ひゃい！？ な、何持ち上げてるのよ！」

「…少し重くなったか？」

「あなたに大根食わされてる時点で体重増えるわけ無いでしょ！ さつさと降ろしなさいよ！」

「昔はよくこうやって喧嘩止めてたよな」

「そうだったわよ…って、何、哀愁に浸っているのよ！ 早く降ろさないとホントに許さないんだから！」

酔っているのか、はたまた恥ずかしいのか。むー、と頬を赤くし、じたばたじたばたと猫のように暴れる零の首根っこから手を放す。まあ、人間は重力には逆らえない。

思い切り体重分、畳にヒップを叩きつけ、喘ぐ零を俺は軽くスルーし、鉄殿、と鉄の傍らへ足を運ぶ。

「鉄殿、そろそろ起きてくれないと物語が始まらないので起きてもらえますかね？」

「ぐがッ!？」

「いびきで返事をしないで下さい」

「…むにやう」

「可愛い子ぶらないでください。あなた、ボスでしょうが！」

「…スピー」

「…零。俺、怒っていいのかな？ …かな？」

「ちよつと、どこから持ってきたか知らないけど見覚えある鉈、持つのは止めてくれない？ 嫌な思い出なんだから」

正直、寝起きの悪い奴には慣れてはいるが、慣れは慣れであつて嫌悪感は消えない。

「やっぱり私が起こすわよ、ナオキはその鉈どっかにしまつてきなさいよ」

「…分かった。任せる」さあさあ、と促されるまま、部屋を追い出された俺は鉈を持ちながら台所へと向かった。

…数分後。

ドガシヤヤヤヤン!!!!!!

大部屋の方で、叩きつけられ何かが割れる音が神田家に響き渡った。

「な、何事だ!？」

「親ビンのいる部屋からだぞ！」

「何だ？ どの組の仕業だ!？」

…すいません、犯人はウチの零で間違いありません。

第二十五章 武蔵零の憂鬱

私こと、武蔵 零はお酒に強い。ぶっちゃけビールなんぞアルコールの低い液体は酒と認めたくないくらいだわ…まあ、おいしいからいいけど。

さて、前置きはここまで。私が言いたかったのは、飲ませた女より先に、夢の世界へと旅立ってしまう男をどう思うか、って事よ。まあ、私の場合は…

…爆音が起こる数分前…

「分かった、任せる」

どこぞやら見憶えのある、先端が細く横に突き出ている鉈を持ち出していたナオキを勢いで説得し、惨劇が起こる前に部屋から追い出すと、私は眼下で爆睡している中年オヤジを眺めた。

「…まったく女に対する礼儀がなっていないわよね」

私は思わず呟く。まあ、そんな事いつでも男の思い通りにはさせないけど。

「さてと…何で起こすかな？」

私は周りを見回したが、あるものは、何か執念が籠もってそうな名前入りバットくらい。

…ん、『聡史』の名前入りバット？

いやいや、今回はスルーよ、スルー。

「他には…おっ、アレなんか…」

と、私は異様な存在感を放つ使い古したバットを跨ぎ、何故か、部屋の隅に置いていたハリセンをひよい、と拾い上げる。

「というか、何故こんなものが…ま、ご都合主義ってやつかしら」
私はハリセンをブンブン振り回しながら、熟睡している鉄に向かつて行く。

「さーて、その身で受けなさい！いざ、正解！」

私はハリセンに氣を注入し、スーパ－ハリセンへと進化させる。

「威力は当社比七倍！！狙うはクリティカル！！スーパ－ハリセン！！ギガスラーツシュ！！」

ドガシヤヤヤヤン！！！！

「ハリセンでギガスラツシュか…いや、すんげー身体中が痛いと思っただよな…」

「零、少しは謝れよ。結果的に起こしたとはいえ…」

「いや、謝ったら負けかな、って思ってるし」

何にだよ、と私を睨むナオキをスルーし、ようやく夢の世界から引き摺り上げた鉄に私は話を始める。

「実はね、鉄。かくかくじかじか…でね」

「ほー、ウチのあすかが誘拐ねー！！…誘拐！？」

「いいリアクションね」

で、どうすんのよ、と私は鉄に問う。まあ、答えは決まっているよなものだけど。

「決まってるだろ！！戦争じゃい！」

「…どこの誰とよ？」

「今日、お前らを呼んだ理由がそれじゃい！犯人は…阿久津しかないわ！」

「阿久津…？あの危ない筋の？」

「おう、決行は今夜。」

「展開が早いわよ！！作戦とか無いわけ！？」

私が怒鳴ると、鉄は不思議そうな顔をし、

「は？あるわけないだろうが！」

と、言い放ちやがった。

…失礼、言葉が悪いわね。

「と、も、か、く！今夜、相手の基地に乗り込むからな！」

「…先が思いやられるわ」

「…確かに」

ヤル気満々の鉄の前に私はナオキと共にため息を吐いた。

…ほんと、先が思いやられるわ。

第二十六幕 セーラー服とシスコンと

で、今夜。ヤル気と殺気に満ち溢れている神田家で、ヤル気などさっぱりない俺ことナオキと、何故かセーラー服に着替えた零は、二人で静かに茶をすすっている訳だが…。

…今夜もナオキがお送りする。

「あゝ、お茶が美味しいわ…」
「…全く」

俺は、高級な茶なのだろうか、家の税込、二百九十八円の粗茶とは香りも味もまったく違う茶をすすった。同じようにセーラー服の零も茶をすすする。

「まったく、いつまでどつたんバツタンやってるのかしら」

「おやつが三百円までだからみんな焦ってるのさ」

「バナナはおやつに含まれないのにね」

確かに先程から周りで下っぱの皆様が忙しそうに走り回っている。

手にはビニールシートやら、焼酎の瓶やら対装甲戦車用ロケットランチャーやら様々な物を持ち、運びだしている。

「で…零、何で今更セーラー服なんだ？萌えにでも目覚めたか？」

「あつ、これ？これは…ネタの下準備よ、下準備！」

「遊びに行くんじゃないよな、俺達…」

「人生にユーモアは必要なのよ。それをユーモアと感ぜられる心も必要だけど」

「しかし…何年前のセーラー服だよ。久しぶりに見たぞ」

「あつ、これ？型は同じだけどこれは私のセーラー服じゃないわよ。要はコスプレマニアの一品よ」

「まあ、一応、それは無いと思うが、念のため……一体誰のだ？」

「神田家当主の」

「ガッテム！」

やはりか…やはりあの親父はそんな趣味があつたのか！だから零と話しが異様に合ったのか！！

「何、がつくりと肩落としてるのよ。ショックだったの？」

「いや、鉄殿だけはまともな人間だと思つていたからな…」

「武蔵家の知り合いにまともな人間なんていないわよ」

「…まともな人間、一人もないもんな、ウチ」

「悲しいけど、これって戦争…じゃなくて事実なのよね」

「武蔵家の現当主がこれだから変人が集まつてくるんだろうな…」

「あら、何か言つた？」

「いや、なんにも…」

…で、深夜。

「ねえ、鉄、ホントにここにあすかがいるわけ？」

「ああ、携帯のGPSで確かめたから間違いないぞ」

自信満々の鉄と、疑いの色を隠せない、いや、隠さないのか、零は廃工場を目の前になんだかなあ…、と納得に欠けている。

「火曜サスペンスみたいじゃない、何か廃工場に乗り込むなんて」

「おい、零…もう中じゃ誰かが暴れてるみたいだぞ？」

「…ナオキも気付いた？まさかだと思つけどね」

「俺もまさかだと信じてるよ」

「何、ごちゃごちゃ言つてんだよ！ほれ、突撃…！！！」

ガンッ！とに錆びた鉄製の扉を勢い良く開き、鉄を先頭に突撃する下っぱ達の後ろからめんどくさそうに騒がしい廃工場中に入っていく俺と零。

「オラッー！！神田家当主、神田鉄自ら愛娘奪還しに來たぞう！！」
血眼臭い愛用の長柄ハンマーを振り上げる、アドレナリン急上昇の鉄が、刀やバットやパラソルなどを構えた下っぱと共に、先客に群がっている敵に突撃していく。

「うわっ！？なんだこのハンマー振り上げたおっさんは！」

「何、ムサシ！？よそ見したら危ないわよ！」

…何だか聞き覚えのある名前が聞こえたような気がするが。

「おい、零…あれって」

「ムサシイイ！…今、お姉ちゃんが助けに行くわよ！」

「勝手に突っ込むな！」

セーラー服の零が物凄いスピードで鉄を追い抜き、群がる男共をすつとばし、ムサシ達と思われる先客の壁になったのは言うまでもない…。

第二十七幕 セーラー服とアサルトライフル（前書き）

えゝ、今回、彪様に素敵なイラストを描いて頂きました。興味がお有りの方はぜひ御覧になってください。

小説家になろうゝ秘密基地ゝ様のイラスト依頼の方に彪様のサイト「雨模様」があります。

…ナオキがかなりツボの作者でした。

第二十七幕 セーラー服とアサルトライフル

え〜と…ぶっちゃけ、後先構わず突っ込みました、これでも武蔵家^{たけくら}の当主の武蔵零よ。

「私の可愛い弟いじめるなんて言い度胸してるじゃないの!」

「れ、零ねーちゃん!？」

怖〜いお兄さんたちに囲まれて、絶体^{のハズ}絶命の我が可愛い弟、ムサシを助けるために切り込み隊長の鉄も追い抜いて、敵陣に突っ込んだじやった訳で…

「どこからでもかかってきなさいよ、この『全国、ブラコンに命掛けてますの会』の名誉会長、ついでに武蔵家当主のこの私、武蔵零がまとめて相手してやるわよ!」

ああ、言っちゃったわ。怖いお兄さんたちの視線が痛いのは乙女の秘密。

「しゃらくせい! たかが女一人増えただけだ! このまま勢いでやっちまえ〜!」

「キーー!」

リーダー格のグラサンに命令され、キーキー奇声を上げながら私の前や横や斜めを飛び回る下っぱ。

「ムサシ、あなた達はナオキの事を盾にでもして、あすかの事助けに行つて来なさい。ここは私と鉄とついでに下っぱがいれば十分よ」

「誰が盾だツ!」

…ツツコミだけはしてくるのね、あの男は。

「分かった。零ねーちゃん、気を付けてね」

「任せなさい。最強伝説、復活させてあげるんだから!」

走るムサシと蘭と…多分、渚っていう子を私は笑顔のまま見送ると、まだ、キーキーうるさい下っぱを見る。

「さて、セーラー服の出番ね…鉄ツ! 例のアレ、投げちゃって!」

「おう！そりゃい！」

鉄は私に向かい、黒光りするものを投げつける。

「いくわよー！必殺！セーラー服と機関銃！！」

私はすかさず、鉄が投げつけたアサルトライフルを受け取ると安全装置を外し、トリガーを引いた。

「キ、キツ！キー！キー！（あ、アサルトライフルだって！？）」

アサルトライフルから弾が雨あられ如く銃口から吐き出される。

「アハハハッ！私にひれ伏しなさいー！」

「キキキツ！キーー！（な、なんだ！？ぎゃーー！！）」

「キキキー！（た、大佐ー！）」

「オラオラオラッ！裁くのは私のアサルトライフルよー！」

「零ッ！格好良いぞ」

「姉さーん！頑張つてー」

「キー！キー！（やれやれー！）」

…何か今、声援に混ざってキーキー変な声が聞こえたけど無視よ、無視。

とりあえず、綺麗に片付いた所で、私はアサルトライフルを構え、かの有名なあの台詞を…

「か・い・か・ん…」

言えたわッ！遂に言えたわ！最近リメイクしたあのドラマの台詞をやつと言えたわー！

…犠牲は大きかったけど。

「下っぱは戦闘員の皆さん…あなた達の犠牲は無駄にしないわ」

「実弾じゃないけどな…」

「キー…（BB弾は痛いっすよ…）」

「いいのよ！私の夢にいちやもん付けないでよ！」

私はアサルトライフル…のモデルガンを呆れ返っているリーダー格の奴に思いつき投げ付けながら、私はギャラリーに叫ぶ。

…そして、ギャッ！というリーダー格の悲鳴。

「おう、零。一人で片付けやがって」

「別にいいじゃない。あの阿久津家の手下なんて大体想像つくわよ。当主があれだもの」

「ただ…古参の奴はかなりヤバいかな」

「…あのさつきから私達を見てる人でしょ？」

私と鉄…そして下っぱ達は斜め向こうに立つ一人の黒服を眺める。

「神田家に…武蔵家か。相手に不満はないな」

「阿久津家の御三人、阿久津…何だっけ？」

私は古参の黒服に薄ら笑いを浮かべる。今の当主は相当の馬鹿だけど、正直、古参の手下はかなりヤバい。過去に鬼の阿久津と呼ばれた一族の事ではあるわ。

「私は阿久津武光…阿久津家を支える者」
たけみつ

「阿久津…武光。いやはや…これはヤバいわよね」

「…本気でやらんとまずいな」

阿久津武光…簡単にいえば格闘よし、頭のキレ具合よし、ルックスは…ダンディズム。親父にしたい男だわ…

「若き武蔵家の当主よ、そして神田家の当主よ…二人まとめてここで片付ける」

「…あまり本気は嫌よ」

「俺達は本気じゃないとヤバいけどな」

私は鉄に笑いかけると、全身全霊…気合を入れた。

第二十八幕 久隠と運命の輪

と、言う事で、盾にされました…これでも武蔵家を支える家政夫、少し切ないナオキです。

「ん、少し気温が下がったな」

俺は目の前に立ち塞がる黒服を片手で軽く吹き飛ばすと、ふう、と一息ついた。

「気温？ん、確かに今日は寒いけど」

「そういう訳じゃない。確かに今夜は寒いけどな。俺が言ってるのはこの工場内だけの話だ。先程とは冷たい…というか乾いた感じがする」

「オレにはさっぱり分からないや…」

「まあ、これから精進すれば分かるようになるさ」

「それって、やっぱり分からないといけないもののなの？」

「正直、生活にはいらなないけどな」

小さい頃からこいつらを見てきた俺にとっては、あまり関わって欲しくないのが本音だが。

…正直、俺や零、あと一応渚の使える『モノ』は絶大な力だ。強い力は強い力を引き付け合う。それは必ずしも良い方向とは限らないからな。

強すぎる力で最後に滅びるのは自分自身だから。

「私は少し分かったわよ」

ムサシの後ろにここぞとばかりピッタリと背中にくっつく蘭が言う。
「蘭は元々そういうのに敏感だからな」

「才能よ、才能！」

えへん、と誇らしげな顔をする蘭と、少し悔しそうなムサシ。

「…渚。あと敵は？」

「はい、え〜と…あすかちゃんまでの道にはもういませんね」

「…そうか」

少し不自然な感じもするが大丈夫だろう。ただ…気温が下がったという事は、零が本気を出したことだからな。用心はしなければ。阿久津の古株が出てきたのであれば、必ずアイツが現われるはずだからな。

「そ、その黒いやつとその他ツ！」

ほら、呼んでもいないのにやってきた。

「こ、ここはこの私、久隠が立ちふさがっているのです！」

思わず、俺以外の三人は何やら日本語がおかしいヤツの方へとへと振り向く。

そして固まる。

そりゃそうだ。隅っこで恥ずかしそうにこちらを見ている刺客がいれば誰だって固まる。

「うわっ！？なんか物凄く淋しそうで、且、キャラが濃い人が何か叫んでるよ！このままじゃ私、影が薄くなる一方で…」

嘆くな、蘭。いつか日の目が当たる日が来るさ。

「……うるさい」

「何よツ！ あなたがキャラ濃すぎなのが悪いんじゃない！」

「それは…嫉妬？」

「…うん」

泣くな、蘭。いつか目立てるときが来るさ。

「とりあえずツ！ こ、ここは通さないんだからね、理由はわかんないけど」

「久隠、久しぶりだな」

「あれ、ナオキ……久しぶり」

「ナオキ…あの引き篋もり寸前な乙女と知り合いなの？」

隅っこで渚に慰められていた蘭は涙目でちらりとこちらを振り向く。

「まあ、一応な。久隠は昔は暗器使いの達人でな」

「暗器……何それ？」

「暗器って言うのは簡単にいえば…まあ暗殺用の武器だと思えば良

い。例えばクナイとか短刀とかな」

「まあ、そう言われてみればそんな格好してるみたいだけど……」

「あれは……久隠の趣味だ」

と、俺は高台から降りてこない久隠を見上げる。

「……普段着だもん」

と、こちらを泣きそうな表情で見つめられても困るのだが。

「で……俺の邪魔をするのか？」

ううん、と首を横に振る。

「ナオキとタイマン張るほど私は馬鹿じゃない……ここは無条件で通してあげる。」

「ん……すまないな、久隠」

俺が礼を言つと、久隠はふっ、と一瞬、姿を消し、瞬時に俺達の目の前まで現われる。

「ただし……ナオキに少し話があるからナオキは借りる」

「俺に話？ ……ムサシ、別に先に行つてもいいぞ。俺は後から追い掛ける」

「……分かった。先に行つてるからさ」

先を急ぐムサシ達に手を振り、俺は久隠の方を振りかえる。

「で……話つては？」

「今回のお詫び」

ああ、と俺はそこらにある木材の上に座り、ちょうど久隠と向き合うように座る。

「まだ時間はある。ゆっくりと昔話にでも花を咲かせようじゃないか」

と、俺はもじもじしている久隠に笑いかけた。

第二十九幕 終演（前書き）

なかなか更新出来ず、お待ちしていた読者様方、すみませんでした。
一応、これで一区切りです。次話からはいつものようなコメディに
戻りますのでよろしくお願いします。

第二十九幕 終演

骨が軋む。一発一発がオレの体に響き渡るのが分かる。

正直、痛い。

だけど…引くわけにはいかないんだ。

「なんだ、私の期待はずれだったのですか、武蔵ムサシッ！守ってばかりじゃ勝てませんよ」

「ッ…！」

思わず俺は身を守っている両腕の痛みに集中を奪われる。

この人はやはりプロだ。

武道を尊ぶ一人なのだとその痛みと共に痛感する。

「ムサシ…負けないで」

蘭の声が遠くで聞こえる。分かっている、オレはこの戦いに勝ちたい。心底思っているんだ。

「自分の無力さを悔やむんだな」

「オレは…無力なんかじゃない！」

待ってました、とばかりにオレは繰り出した腕を取り、力の方向に逆らわずに受け流す。

その瞬間、相手の腕が支点となり、威力を殺せなかった相手の身体は宙へと投げ出される。

「諦めないさ、オレは…」

コンクリートの地面に背中を叩きつけた相手…阿久津家の一人、阿久津恭介をオレは見下した。

「やっときましたか、武蔵家の一族よ」

オレと蘭、そして渚ちゃん、奥に進んでいくと、そこにはいかにもお坊ちゃま育ちのような男と、金髪の麗しい青年が、椅子にちょこ

ん、と座らせてあるあすかを挟み、立っていた。

「あすかッ！無事だったか！」

「ムサシ〜！わざわざ助けに来てくれたのね！」

思ったより元気そうなあすかにオレは心底安心した。正直、あまり良い光景だとは思っていなかったからだ。

…火曜サスペンスの見すぎかも知れないが。

「来たな、武蔵ムサシッ！恋敵はボクチンが直々に倒してやるものね」

と、いきなりお坊ちやまが叫びはじめた。すこしくらいこっちの様子を見ればいいのに…

「とりあえず、あんた誰よ！？」

蘭が叫ぶ。しゃべり方が気に入らなかったのだろうか？

「よくぞ聞いてくれました！ボクチンは現阿久津家当主！阿久津織^お太^たなのね！」

「…変な名前」

蘭がぼそりと呟く。蘭よ、それは突っ込むな。

「というか、恋敵ってはどういうことよ？」

「恋敵は恋敵ね！あすかちゃんを巡っての壮絶恋愛バトルの始まりなのね！」

「…とんだ無駄骨だったわね」

状況が掴めずに啞然とする織太。確かに、オレはあすかを巡って壮絶恋愛バトルなぞする必要はないわな。

「ちよつと蘭っ！余計なこと口走ってんじゃないわよ！予定ではこのままムサシとそのオタクが戦って、ムサシが勝って、私とムサシは永遠の愛を誓い合うはずだったのにいい！」

「何、小賢しい計算してるのよ！」

…多分、あすかの事だから捕まってから考えたんだろうな。あすかにはそういう前向きさが滲み出ているし。

「で…織太、あすかは返してくれるわけ？」

オレは多少シヨックを受けている織太に話しかける。

「武蔵ムサシよ！勝負ね！」

「ヤケクソで勝負はやめようよ…」

「ここで引いたら男としてのプライドが許さないのねー！…恭介、やっておしまい！」

「戦うのはお前じゃないのかよー！！」

オレと蘭と渚ちゃんは同時に突っ込んだ。

「いや、だって…痛いじゃない…」

なぜか赤面する織太。確かに戦い向きの図体ではないとしても…

「いやいや…私でよければお相手願いますか？」

「オレとしてはあんまり戦いたくはないんだけど…やらないとダメなわけ？」

「そうではありませんが…お互いのプライドを賭けての男の戦いですから」

「…これでやらなきゃ男じゃ無いつてわけね」

オレはニコニコ笑っている阿久津恭介に苦笑いを返した。

「改めて…武蔵ムサシ、参ります！」

「阿久津恭介です…お手柔らかにお願いしますね」

恭介さんと改めて対峙すると相手の大きさを感ずる。体格の問題じゃない。

氣の強大さに。

ここに止まっているだけで冷や汗が身体を湿らせる。阿久津家の当主はアレだけど、この人は出来る人だ。オレの本能が疼く。

「どこからでもどうぞ」

恭介さんはいまだに笑みを浮かべながらに言う。

（先手必勝か…）

オレは地面を蹴ると、オレの射程圏内まで踏み込む。

「貰っ…」

「甘いですよ。自分の射程圏内と言うことは相手の射程でもあることをお忘れなくっ！」

オレの一打を身を縦にして避けると、がら空きのオレの脇腹に拳を

浴びせる。

「ッ！」

「相手の攻撃が一打で終わると思いますか！」

一発、二発と背中、脇腹へと打ち込まれる。意識が一瞬飛び、身体が硬直する。

「つく！このっ！」

オレは痛みには耐えながら身体を捻り、三発目を両腕で受け止める。しかし恭介さんは攻めるのを止めずにオレの両腕目がけて拳を突き立てる。

「攻めは最大の防御にもなりうるのです！」

一発が重い一打をそう食らっていてはどうか防いでいる自分の腕が壊れるのも時間の問題だ。痛みと焦りで全身から汗が染みだす。

（何か…何か手は…）

技量でも経験でも阿久津恭介には勝てない。だけど…どんなに強者だって一瞬くらい隙ができるはずだって、零ねーちゃんがよく言っていたよな…

（一瞬だ…一瞬を見逃すなよ、オレ…）

徐々に押されている身体に無理矢理前に押し込みながら、オレはその瞬間を待っていた。そして…

「あきらめないさ、オレは…」

コンクリートの地面に強打した身体の一部を痛そうに擦っている阿久津恭介を俺は見下した。

「いや、一本取られましたね。さすがは武蔵家の継承者だ」

ハハハ、と恭介さんは笑みを浮かべる。やっぱり…全然本気なんかじゃなかったらしい。

「一度、お手合せしたかったんですよ。あの武蔵零の弟がどんなものか」

「……」

俺は黙ったまま、恭介さんの話に耳を傾ける。それを知ってか知らずか、恭介さんは話し続ける。

「センスはさすがは親……というか祖父ゆずりだね。全く、羨ましいかぎりだ。ただ……練習不足だね」

「……零ねーちゃんはオレに格闘技……いや、武蔵流をあまり積極的に教えてはくれませんでしたから。それよりも大事な事があるから……」

「なるほど……零らしい」

恭介さんはひよい、と立ち上がると、おもむろに懐に入っているくしゃくしゃになったタバコの箱から一本タバコを取り出し、火を付けた。

「アイツ……キミのお姉さんは未来を見つめてるからね……それが良いのか悪いのかは分からないけどさ」

「未来……ですか？」

白い煙を吐く恭介さんにオレは尋ねる。

「これからの将来、『武』はいらない……詳しくはお姉さんに聞くのがいいとおもっけどさ」

「将来に『武』はいらない……ですか」

零ねーちゃんがそんな事を考えていたなんて意外だなあ……とオレは思った。あのふざけたねーちゃんからは想像も出来ない。

「おっ……久隠とあれば……ナオキさんか？」

「恭介、久しぶりだな」

少しタバコ臭いナオキは、恭介さんに話し掛ける。古くからの知り合いなのかも知れないな。

「久しぶりですね、アレ以来ですか？」

「ああ……そういえば、武光はどうした？」

「武光ですか？今頃寒さに震えているかも知れませんか」

「……零の相手だったのか。しかし……今回は悪ふざけすぎだぞ。いい迷惑だよ」

「いやはや…当主の趣味ですから」

「当主の教育はお前たち古参のものがすればいい」

「まあ、その通りなんですけどね」

「その通りじゃないわよ！恭介ッ！」

聞き慣れた声と共に、零ねーちゃんが、なんだか凄くゴツイ人と一緒にアドレナリン爆発で近寄ってきた。

「恭介ッ！これすべてあんたの責任だからね！」

「零ではありませんか…武光はどうしましたか？」

「武光？ああ、めんどくさかったから鉄に担がせたわ」

ほら、と零はなんだか凍えているナイスミドルを担いだオッサンを指差した。

「…で、今回の首謀者はどこのドイツ人よ！」

「…寒いぞ、零」

一瞬凍り付いた空気に負けじと、ナオキがやや無理して突っ込みを入れる…ねーちゃん、それは辛いよ。

「零ねーちゃん…阿久津家の当主はあれだよ」

オレはなんだか零ねーちゃんの周りの空気が一段と冷たくなっているのを感じながら、あすかが縛られている椅子の後ろに頭だけ隠して…というか隠れている織太を指差した。

「ほ…ん…首謀者が私から隠れる何ていい度胸ね…」

「な、なんなんだな、お前は！ボクチンを阿久津家の当主とし…て…の…！？」

「何…？全然聞こえないんだけど…」

零ねーちゃんは織田の右腕を掴むと、命一杯、力を入れているらしく、だんだん織田の表情が苦痛で歪んでいく。

「痛い冷た痛い冷た痛い冷たい！！」

「このまま、雪だるまにしちゃうわ！」

「止めんか、零」

般若の表情を浮かべながら力を入れ続ける零にナオキがやれやれと、必殺、家政夫チョップをお見舞いする。あれって地味に聞くんだよ

ね…

「痛ッ！な、何すんのよ、ナオキ！」

「全く…少しは落ち着いたらどうだ」

「…分かつてるわよ！」

と、ようやくクールダウンしてきた零ねーちゃんは、ふう…と深呼吸する。

「恭介！久隠！武光！何でボクチンがやられてる間に助けもしないで武蔵家の人間と仲良くお話してるのね！」

「いやいや、すみませんでした。すっかり忘れてましたよ」

「ホント、ホント」

怒り心頭で真っ赤になりながら口を金魚みたいにパカパカやっている織太をスルーし、恭介は零ねーちゃんの方に身体を向き直す。

「さてと…今回は誠にご迷惑おかけしました。阿久津家を代表してお詫び申し上げます」

「…何よ、その棒読みは」

「苦手なんですよ、昔からこういう改まったものは」

「…まあ、いいわ。鉄も久々に暴れて満足でしょ？許してあげなさいよ」

「じゃあねーな…まあ、ストレス発散にはなったな」

武光さんを下ろしながら、鉄と呼ばれたオッサンはガハハ、と大きな声で笑った。

「…よし、これにてこの話は終わり！後から恨みつこ無しよ！」

「ありがたいです。我ら阿久津家当主はみっちり教育しておきますので」

「みっちりバッチリ頼むわよ……さて、帰りましょうか。正直疲れたわ」

零ねーちゃんはオレ達に向かって笑みを浮かべていた。

「あなたたちもよく頑張ったわ。けど…あんまり自分達だけで危ない世界に突っ込んだじゃダメよ。特に蘭は」

「は…い…零お姉さま」

「渚も巻き込んでごめんなさいね」

「いえいえ…結構楽しかったですわ」

「そしてムサシ…大丈夫？」

「オレは大丈夫だけど…零ねーちゃん、オレもっと強くなりたいよ。自分に自信が持てるくらいに」

「…そう」

零ねーちゃんは少し俯くと、一言返事を返した。それがオレにはなんだか、悲しく聞こえた。

「さて…帰るか。早く帰ってゆつくり風呂でも入ろう」

「それもそうね。私は早く暖かい布団に潜り込みたいわ」

「私もですよ、零お姉さまー！」

ナオキと零ねーちゃんは笑いながら、阿久津家の方を向いた。

「全く…次からは承知しないわよ」

「ハハハ…またお会いしましょう、武蔵家の皆様…特に武蔵ムサシ君」

「恭介さん…次に会うときには、もっと自分に自信が持てる男になつておきます」

「ああ…楽しみにしてるよ」

こうして、オレ達の長い一日はようやく終わりを告げた。いろんな事がありすぎて正直、参ってしまいそうだけど…オレは少し『武人』として、成長できたと思った。

…何か忘れているような気が。

「ちよつと！…誰か助けなさいよ！この縄解きなさいよ！
僕の事助けに来たんじゃなかったの！…ちよつと誰か返事してよ！
！何で誰も助けなかったのよ！！」

放置されること数時間…叫ぶこと一時間。今回の目的である、あす
か奪還作戦の本質、あすかの奪還は皆からとうに忘れられ、廃工場
に手足縛られたまま椅子に放置された神田あすが、ようやく思い
出したムサシ達によって保護されるのはそれから三日後の事だった
…。

くあすか奪還作戦・完く

第三十幕 梅雨な日にはカードゲームを（前書き）

遂に、遂に…第三十幕まで来ることができました！これも皆様の応援のおかげでございます！感謝感謝雨、あられでございます！ 連載は不定期になってしまうと思いますが、これからもよろしく願います。

第三十幕 梅雨な日にはカードゲームを

えーと…あすかが行方不明になったり、オレ達が黒服にーちゃんとバトルしたり、零ねーちゃんがセーラー服姿で機関銃乱射しまくったり非常識な日々から少し経ち、六月になりました。武蔵ムサシです。

「私ね、正直梅雨って嫌いなよ」

外では梅雨らしく、しつとりした止まない雨が降り続き、せつかくの日曜日だっというのに家族揃って家に引き籠もっていた時、唐突に零ねーちゃんが口を開いた。

「俺だって嫌いさ。洗濯物が乾かないからな」

なんだか小難しい洋書を読みふけていたナオキが、いつもより少し不機嫌そうに口を開いた。主夫の悩みだよね、ナオキ…。

「そついう事じゃないのよ、ナオキ！私が言っているのはこの空気よ、雰囲気よ！梅雨だからって家に引き籠もっちゃって…不健康極まりないわ！」

「半引き籠もりのお前が言ってもまったく説得力が無いぞ」

ドバツ！といきり立った零ねーちゃんに冷たい突っ込みを入れるナオキ。

「私は引き籠もりなんかじゃない！！」

と、クール突っ込みに憤慨する零ねーちゃんにナオキの殺人突っ込みがねーちゃんに向けられる。

「じゃあ！なぜ！月の大半！家でのおんびり過ごしてるんだよ！」

「そ、それは…会社に行くのが面倒臭いからよッ！！」

「それを世間では引き籠もりって言うんだよッ！！」

「はうう！痛いところを突いてくるわね、家政夫！」

「じゃあ逆に聞くんが、お前はこの雨の中、外でピクニックでもしたい訳か？」

呆れているナオキに、我らの零ねーちゃんはなぜか悟ったような表情をみせる。

「雨の中、傘をささずに踊る人間がいてもいい。自由とはそういうものよ…」

「また誰も知らないようなネタを…」

とりあえず…と零ねーちゃんは、がさごそと雑貨入れを漁ると、一組のトランプを持ち出してきた。なかなか年季と数々の名勝負を生み出したという有名…なハズのトランプなのだ！

「名セリフを言ってみたものの…やっぱり梅雨といったらトランプよね」

「やはりインドアではないか…」

「それじゃあナオキ抜きでトランプしましょうか？」

「…わかったよ。今日はトランプで行こう」

と、ナオキは零からトランプを受け取ると、慣れた手つきでトランプを切ってゆく。

「で…何をやるんだ？ばば又キか？」

「そうねえ…オーソドックスでいいんじゃない？」

よし、とナオキはオレ達にトランプを配る。…とりあえずオレにはジョーカーは無い。

「さて…じゃあ時計回りね。蘭、引いていいわよ」

「いきますよ、おねー様！！」

と、今までのいかいなのか分からなかった蘭は唯一の出番だと悟ったのか、気合十分で零ねーちゃんからトランプを引いた。

「…次はムサシが私のを引いてごらんなさい！」

「なんでそんなに偉そうなんだよ」

「だって私から引かないとゲームが進まないじゃない」

「それはエゴじゃないかなあ…」

といいながらカードを引くオレ。引いたのはクラブのジャック。

「一組出来たつと…ナオキいいよ」

「ウム…」

オレのカードを凝視しているような…気がするナオキが一枚カードを引き、組みになったを捨てた。

「さて…零、引くがいいさ」

「…これね」

見極めたようにカードを引く零ねーちゃん。そして二枚のカードを捨てる。

「二順目ね、蘭引きなさい」

「ハイ、おねー様、引かせていただきます」

こんなのが三順、四順と続いて……

「ムサシ、引いてごらん」

「…零ねーちゃんの真似はやめい！」

と、オレは蘭の手元にある一枚残ったカードを引く。

「よしっ、上がり」

傍で喜ぶ蘭と対象に、オレは手元のカードと睨めっこする。手元にあるのは、ダイヤのエースと嫌味なジョーカー。

ナオキは既に上がっていて、優雅にコーヒーなんて飲んでいる。

という事は…残っているのは零ねーちゃんとオレの二人。

「…零ねーちゃん、どうぞ」

「行くわよ、愛するブラザー」

オレは零ねーちゃんの前に手札を差し出すと、零ねーちゃんは迷わず一枚のカードを引く。

…途端、零ねーちゃんの表情がピクツ、と反応する。

「…生きるか死ぬか、二捨一択よ。マイ・ブラザー」

「どちらにしようかな…」

とオレは左のカードに手を伸ばす…と、

ズギユウウン！

…ん？とオレは手を思わず引っ込める。

左のカードに嫌悪感を覚えたオレは致し方がなく、右のカードに手

を伸ばす…が、

そこにシビれる！あこがれるウ！

と変な耳鳴りが…

「…零ねーちゃん、何か変なプレッシャー掛けてない？」

「気のせいよ、気のせい…」

と何故か顔を背ける零ねーちゃん。

オレは気を取り直して、再び左のカードに手を伸ばし…

ズギユウウン！

オレは再び右のカードに手を伸ばし…

そこにシビれる！あこがれるウ！！！！

とまた不可思議な耳鳴りが…

「ねえ、零ねーちゃん…変な声が聞こえるんだけど」

「気のせいよ…確実の気のせいよ」

とオレと目線を合わせようとしないう零ねーちゃん。

さて…どちらを引くべきか。変な効果音が、不可解な声か…

「…左！」

とオレは変な効果音に負けずに左のカードを引く！！

…手元にはにやにや、といやらしく笑うジョーカーがいた。

「…残念ね、ムサシ」

「まだだ！まだ終わらないよ！」

「フッフッフ…チェックメイトよ」

と零ねーちゃんは不敵な笑みを浮かべるジョーカーに手を伸ばし…

「…人類はどこで道を誤ったのかしら」

「別にお前の負けがそれを証明しているわけじゃないよな、零」

ブツブツと台所で食器と泡に囲まれながら零ねーちゃんはバツゲームの食器洗いを不満げにこなしている。

「しかし何故あそこまで追い詰めという負けるかね」

ナオキは香りがいい紅茶を飲みながら零を眺める。

「おねー様は詰めが甘いんですよ」

「…いやゝなんだかつい弟が可愛くなっちゃってね」

「勝負事に愛は無し…でしょ？零ねーちゃん」

オレはハイハイ…とうなだれる零ねーちゃんに満面の笑みを向ける。

「あつ、雨止んだね」

そんな光景を楽しそうに眺めていた蘭は、雨雲から差し込んだ光がカーテンを照らすのに気付き、窓の外をみながら言う。

「あつ…ホントだ」

オレも蘭の元へと駆け寄り、外を眺める。差し込んだ光が雨雲とのコントラストを生み、一枚の絵画を思い浮かばせた。

「…また明日も雨かしら？」

零ねーちゃんも外の光景に、手を止め眺めながら口を開いた。

「…梅雨だからな」

ナオキがぼそり、呟く。

「明日こそ晴れるよ、明日こそ！」

オレは徐々に明るくなってきた空を眺めながら、力強く呟いた。

第三十幕 梅雨な日にはカードゲームを（後書き）

…この第三十幕は他の話とはやや、イメージを違くしてみました。
何故かって？そりゃあ…梅雨の籠もっている1日のテンションにあ
わせた結果だったりします…。

第三十一幕 梅雨時々惨劇

朝から雨が降り続く梅雨の六月。やはり日光の光をさんと浴びなければ新しい朝が来たという実感が湧かず、少し眠い武蔵ムサシがお送りします。

「おはよー、今日も朝から雨だね」

真つ暗な空の下、まるつきり朝だと言う感じがしないまま、起きてきたオレでありましたか、それはオレだけじゃなかったらしくて…

「ふああああ…おはよう、ムサシ」

「おはよー、零ねーちゃん。なんだかいつもより眠そうだね」

そりゃあそうよ、と寝癖が目立つ髪を手櫛で無理矢理直しながらテーブルに着く零ねーちゃんは不満そうに答えた。

「この暗さ、まるで今から夕食みたいよ」

「ホント、そうだね。朝起きたらこれだものね…ところで、蘭は？」

オレは零ねーちゃんの目の前の椅子に腰掛けると、まだ、まだ起きてこない熟睡大魔王の顔を思い浮べた。

「蘭？そろそろ起きてくるとは思うけれど、ちょっと見てくるわ」

「零ねーちゃん、くれぐれも、くれぐれも！気を付けてね」

「…わかってるわ、マイブラザー」

と、零ねーちゃんはオレに向かってウインクすると、髪を掻き上げ二階にある蘭の部屋へと向かっていった。んゝなにやら朝から事件の臭い…。

「ん、起きたのか、ムサシ」

「あつ、ナオキ…おはよう」

ああ、とコーヒーをオレに手渡すナオキ。この人は朝でも昼でもテンションが変わらないなあ…。

「蘭はまだ寝てるのか？」

「うん。今ねーちゃんが起こしに行ったよ」

「ふむ…蘭の寝起きの悪さは天下一品だからな。なにやら心配な気が…」

そつだね、とコーヒーを格好よく口に含むオレだったが…。

ドガシヤヤヤヤン！！

「蘭ー！私よ私！ち、ちよっと、みぎやあああー！」

…と、朝から口に含んだコーヒーをテーブルにぶちまける事になってしまった。憐れなり、オレの一時の格好つけ。

「な、ナオキ！？今のは…？」

「ん、零の断末魔だ」

「あなたはどんな時でも冷静なのね…」

「…では静かになった所で零の最期でも見に行こうか。骨くらい拾ってやらんとな」

「あ、もう事切れたこと前提なのね」

オレとナオキは先程とは違い忽然と沈黙を保っている二階へと足を運ぶ。蘭と隣のオレの部屋は階段を登ったらすぐにあり、その向かいには零ねーちゃんやじいちゃんの部屋がある。二階はウチの家族のプライベートゾーンなわけ。

「扉は閉まつてるね」

「ふむ、零が閉めたのだろうか、密室にしようとしたのが逆に仇となったな」

「蘭の逃げ場も無くしたけど自分の逃げ場も無くなっちゃったんだよね」

「そつだな…さて入ろうか」

と、ナオキは『熟睡中』と可愛い天使のキャラクターのプレートを立て掛けてある蘭の部屋のドアを二、三度ノックした。

…返事はない。中にいるハズの零ねーちゃんの声もまったく無い。

「蘭、勝手に入るからな」

と、ナオキがドアを開けると…オレ達を出迎えたのはピンク色の女の子らしい部屋とベッドの脇に持ち主を護るように座る大きなクマのぬいぐるみ。それを中心に取り囲む小さなキュートなぬいぐるみ達。そして、そんな可愛らしーモノ達に囲まれ、天使の寝顔を浮かべる我が家の低血圧大魔王。

「おや、やはりウチの大魔王はまだ夢の中だな」

「な、な、ナオキ！？アレッ、アレ見て！」

と、オレはクローゼットを指差した。そこには…頭からクローゼットに突っ込み、ピクリとも動かない零ねーちゃんの姿があった。覚悟していたけど、まさかこれほどとは…

「まったく…クローゼットが台無しだな」

「着目点はクローゼットじゃなくて、そのクローゼットに突っ込んでる零ねーちゃんでしょ！？」

「…蘭がやったんだろうな」

ナオキはクローゼットに食べられたみたいな格好で動かない零ねーちゃんに近づいた。オレも近づいてみると、見事に頭から逝った後が痛々しいほど残っている。蘭のお気に入りピンクの水玉模様のパジャマの裾に付いている水玉が、いつもよりやけに多かったり、赤く見えたりしたのはオレの見間違いじゃないらしい。

「というか、ここは密室だったんだから蘭以外の犯人はいないでしょ？」

「いやいや…案外、あのクマが零を吹っ飛ばしたのかもしれん」

「まさか…あれはぬいぐるみでしょ？」

と、オレは大きなクマのぬいぐるみを見る。これは蘭がまだ小学生の頃、誕生日プレゼントに朝蔵家…蘭の親に貰ったものだ。

「そんな事よりこれからどうするの？」

「どうするって…起こさないとな。眠いから学校休むとか言えんだろ」

「けど…零ねーちゃんの後を追いたくないんだけど」

「それはオレだって一緒だ…だが、起こすしかないだろ」

ナオキは用心しながらスースー、可愛らしい寝息を発っている蘭のベッドへと近づいてゆく。

「とりあえず…第一チェックポイントとして布団を剥がす」

「まずは声掛けるのが第一チェックポイントじゃない？」

「今更、声を掛けたところで起きるレベルじゃないだろ、コイツは」と、ナオキは蘭の掛け布団をひっぺ返した。そこにはパジャマが良いやつにはだけて胸元オープンな蘭が。なぜ、そうウチの女性陣はそう無駄にエロスなのか。

「ううーん…」

と胸元オープンの蘭には寒かったのか、少し唸り、身体を捻る蘭。そんなに動くと只でさえイエローゾーンの格好が青少年にはNGのレッドゾーンに達するから止めてくれ。

「よし、次だ。ムサシ、悪いが目覚まし時計を貸してくれないか？」

「えっ？別にいいけど、蘭が目覚まし時計使ったほうが早いんじゃない？」

するとナオキは黙って零ねーちゃんの横を指差す。そこにはバラバラに朽ち果てた…多分、目覚まし時計がその生涯を不本意に終えていた。なぜか、誰かの赤い体液が破損した目覚まし時計に付着しているかはオレと君の秘密さ。

「う、うんわかった、今持ってくるね」

と、オレは隣の自室に行くと、シルバーに輝く目覚まし時計を手に取り、待っていたナオキに手渡した。

「第二チェックポイントは言うまでもないが、目覚まし時計だ」

「分かってる、けど効くかなあ？」

やってみないとわからんな、とナオキは蘭の耳元に目覚まし時計をセットする。

「第二の爆弾…スイッチ・オン！」

ピピピッ、ピピピッ、ピピピッ…

「ううゝん…うるさい…うみゆ…」

「おつ、効いているな、なかなか」

オレの貸したシルバーの目覚まし時計は普通の電子音を蘭の耳元で響かせていたのだが、

「うみゆゝ！うるさい！」

と、寝ぼけた蘭にその輝くボディを捕まれ、

「塵へと消えろぅー！！」

と、クローゼット・イン零ねーちゃん目がけ…たか、どうかは分からないけど、松坂大輔もビックリな豪速急で投げ付け、オレのシルバーの目覚まし時計は零ねーちゃんに激突し、鈍い爆音を響かせながら空中分解した。

「……あつ」

「……うむ、次の手を考えるか」

「あの…零ねーちゃんに当たったんだけ」

「死人に口なしだ」

ハハハ、と乾いた笑い声を上げるナオキ。まさか零ねーちゃんに被害が被るなんて思っても見なかったみたい。

「けど、どうするの？もう朝食のスクランブルエッグが冷めちゃうよ」

「むにゃ…スクランブルエッグ？」

「おつ、反応したぞ。待てよ……もしかすると」

と、ナオキは何やらそそくさと階段を降りていつてしまった。天使の寝顔の悪魔と、尊い犠牲者がいる部屋に残されたオレは、零ねーちゃんから視線を外す。死んじやいないよね…

「ムサシ、少しどいてくれないか？」

「ナオキ…その両手に持つてるもので何する気？」

オレは、ナオキが両手に持っている朝食の皿を指差した。蘭の顔面にでもぶちまける気なのだろうか？

「蘭、蘭…朝食だぞ？今日は前が好きな甘いスクランブルエッグだぞ？今、起きないとムサシに食べられるぞ」

「むにゃ！？…スクランブルエッグ」

ピクツ、と反応を見せる我らが大魔王。

「リビングで待っているからな。早く起きてこいよ、でないと…」

ピクピクツ、と再び反応する蘭。それを確認するとナオキは、戻るぞ！と俺と一緒に階段を降りる。

「さて…お寝坊大魔王は起きてくるかな？」

リビングへ戻りながらナオキが呟く。確かに蘭には反応があったからもしかして…。

「…おはよ、ナオキ」

と、階段を怪しげな足取りでやっと降りてきたのは、朝蔵 蘭、その人。

「おはよう、蘭。少し寝すぎだぞ」

「んゝ、だって暗いんだもん…」

「沢山の犠牲者も出た」

「んゝ、だってうるさいんだもん…」

と、まだ眠いのか、目を両手で猫の様にこすっている蘭はあたかも自分には罪の無いような言いぶりを見せる。

「蘭、少しは朝に強くなれよ。おかげでこっちは朝からドキドキハラハラの連続だったんだよ」

「ムサシ…私の分のスクランブルエッグ食べないでね」

「…誰が食べるか」

と、蘭はまだ疑っているのか早々にテーブルの自分の位置に座るとスクランブルエッグをスプーンでカチャカチャし始めた。

「あれ、ナオキゝ。零おねーさまはまだ寝てるの？」

俺とナオキの手が止まる。

「ら、蘭…憶えが無いなら、自分の部屋のクローゼットを見てこい。今すぐだ」

「へっ？いいけど…」

と、スプーンを置いて席を立ち、階段を登っていく蘭…。そして…「キヤヤヤヤヤ！…！れ、零おねーさま！殺人事件よゝ！火曜サ

ス Pens よ！ ナ オ キ、 救 急 車 を 早 くー！」

「… や は り 全 く 憶 え て い な い か」

「 大 体 予 想 は つ い た け ど さ」

と、 俺 と ナ オ キ は お 互 い た め 息 を 吐 い た。

そ の 後、 な ん と か 一 命 を 取 り 留 め た 零 ねー ち ゃ ん は、 病 院 で 今 日 の 事 を 次 の よう に 話 し て い ま し た。

「 あ れ は 蘭 じ ゃ な か っ た わ… あ れ は、 蘭 の 形 を し た 悪 魔 だ っ た… 私 を 殺 そ う と し た あ の つ、 冷 た い 目 は 悪 魔 そ の も の だ っ た」

と…。 今 日 の 出 来 事 か ら 蘭 を 無 理 矢 理 起 こ し 禁 止 令 は 家 族 の 中 の 暗 黙 の 了 解 に な り ま し た と さ。 め で た し め で た し！

第三十一幕 梅雨時々惨劇（後書き）

第一部はこんな中途半端で終わります。日常ってはいくつものではないのでしょうか？ 区切りなんて無い、と。

半分嘘です（泣）止む無く第一部にしました。

少したったら真面目に（ちゃんとして）プロットを細かく書いて（連載しようと思います、ハイ（Ｔ　Ｔ）

動物園SOSは……あの、その…ちゃんと直してから次回、載せます。ごめんなさいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0141b/>

ある家族と愉快的仲間たちと...

2010年10月11日05時49分発行